

昆虫類

1 山梨県レッドデータブック昆虫類におけるカテゴリと要件

カテゴリ及び基本概念		定性的要件	定量的要件
絶滅 Extinct(EX) 県内ではすでに絶滅したと考えられる種		過去に本県に生息したことが確認されており、飼育下を含め、本県ではすでに絶滅したと考えられる種	
野生絶滅 Extinct in the Wild (EW) 飼育下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種		過去に本県に生息したことが確認されており、飼育下あるいは明らかに自然分布域の外側で野生化した状態で存続しているが、本県における本来の自然の生息地ではすでに絶滅したと考えられる種 【確実な情報のあるもの】 ①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。 ②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認出来なかった。 【情報量の少ないもの】 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。	
絶滅危惧 I 類 Critically Endangered (CR + EN) 絶滅の危機に瀕している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	絶滅危惧 I A 類 Critically Endangered (CR) ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 ②既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。 ③既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 【情報量の少ないもの】 ⑤それほど遠くない過去 (30 ~ 50 年) の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。	次のいずれかに該当する種 【広域 (4 市町村以上) に分布する (していた) 種】 ①産地数または分布市町村数が、基準年 (1950 年頃) と比べて 10% 以下に減少。 【分布が孤立し、3 市町村以下程度に限定される (されていた) 種】 ②生息範囲の合計が現在 10km ² 未満で、個体数が著しく減少傾向にある。 ③発生地数が基準年 (1950 年頃) と比べて 20% 以下に減少。
	絶滅危惧 I B 類 Endangered (EN) I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①既知の 80% 以上の個体群で、危機的水準にまで減少している。 ②既知の 80% 以上の生息地で、生息条件が著しく悪化している。 ③既知の 80% 以上の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④分布域のかなりの部分に交雑のおそれのある別種が侵入している。 【情報量の少ないもの】 ⑤過去 (20 ~ 30 年前) の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。	次のいずれかに該当する種 【広域 (4 市町村以上) に分布する (していた) 種】 ①産地数または分布市町村数が、基準年 (1950 年頃) と比べて 20% 以下に減少。 【分布が孤立し、3 市町村以下程度に限定される (されていた) 種】 ②生息範囲の合計が現在 10km ² 未満で、個体数が明らかに減少している。 ③発生地数が基準年 (1950 年頃) と比べて 30% 以下に減少。
絶滅危惧 II 類 Vulnerable (VU) 絶滅の危険が増大している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のカテゴリに移行することが確実と考えられるもの。		次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ②大部分の生息地で、生息条件が明らかに悪化しつつある。 ③大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④分布域の相当部分に交雑のおそれのある別種が侵入している。	次のいずれかに該当する種 【広域 (4 市町村以上) に分布する (していた) 種】 ①産地数または分布市町村数が、基準年 (1950 年頃) と比べて 30% 以下に減少。 【分布が孤立し、3 市町村以下程度に限定される (されていた) 種】 ②生息範囲の合計が現在 10km ² 未満で、個体数が減少傾向にある。 ③発生地数が基準年 (1950 年頃) と比べて 40% 以下に減少。

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>準絶滅危惧 Near Threatened (NT) 存続基盤が脆弱な種 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの。</p>	<p>生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。</p> <p>a) 個体数が減少している。 b) 生息条件が悪化している。 c) 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 d) 交雑可能な別種が侵入している。</p>	
<p>情報不足 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種</p>	<p>環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息状況をはじめとして、カテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。</p> <p>a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。 b) 生息地が局限されている。 c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等） d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。</p>	

付属資料

<p>絶滅のおそれのある地域個体群 Endangered Local Population (LP) 地域的あるいは遺伝的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する地域個体群</p> <p>①生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱ふべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。 ②遺传的な遺伝子型を有すると考えられ、生物地理学的観点から見ても重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。</p>
<p>要注目種 Noteworthy Species (N) 及び要注目地域個体群 Noteworthy Local Population (NLP) 近い将来絶滅危惧に移行しないか、その動向を注目する必要のある種または地域個体群</p>	<p>現状では生息地数・生息環境ともに安定していて絶滅の危険度は小さいが、今後生息条件の悪化や捕獲・採集圧の増加等によって、「絶滅危惧」のカテゴリーに移行する状況にならないか注目して経過観察の必要があると考えられる種または地域個体群で、次のいずれかに該当するもの。</p> <p>a) 環境省のレッドリストで絶滅危惧種に選定されている種またはその地域個体群。 b) 隣接する都道府県のレッドリストで絶滅危惧種に選定されている種またはその地域個体群。 c) 環境省や隣接する都道府県のレッドリストで絶滅危惧種に選定されていないが、遺伝的に特異であったり、山梨県が分布の辺縁部にあたるなど生物地理学的に貴重と判断される種または地域個体群。</p>

2 山梨県内における生息種及び分布状況の概要

昆虫類は、最も多くの種数を擁する生物のグループで、地球全体で約75万種が生息すると推定されている。日本国内での総種数は、約3万2千種が記録されていることから、山梨県内でも国内の半数に近い1万5千種以上は生息すると推定されるが、全グループにわたる十分な調査が実施されておらず、正確な生息種数は不明である。確認率が高いと思えるグループはチョウ類、カミキリムシ類、トンボ類で、現在までに確認されている種数はそれぞれ、153種、328種、82種である。

山梨県は地理的には本州の中心に位置し、標高約75mの県南部から標高日本一の富士山3,776mまでその標高差3,700mもある地域で、甲府盆地を中心に、周辺を富士山・八ヶ岳などの火山地帯、国内第二位の高さを誇る北岳を中心とした南アルプス、北部は奥秩父山系等の起伏にとんだ山岳地帯がとり囲んでいる。地質的にも、糸魚川－静岡構造線が西部を縦断し、そこにフォッサマグナ地帯が形成されているという地史的にも変化に富んだ地域である。植生も、カシ類を主とする暖帯（低地帯）から、コナラ・ミズナラ・ブナを主とする温帯落葉広葉樹林帯（山地帯）、それに、コメツガ・シラビソを主とした針葉樹林帯（亜高

山帯)が続き、さらにハイマツ帯より上の高山帯まで、水平的にも垂直的にも多様な植生がみられる。

山梨県は、このように地形的、地質的、植生的に多様性の豊かな地域であるため、長野・群馬と並んで、国内有数の昆虫類の生息地の一つとして位置づけられている。

しかしながら、この山梨県内の昆虫類も、前回のRDB作製後の15年間で大きく変化している。それには、大きく分けて次の四つが挙げられる。

第一は、里山を主な生息地とする多くの昆虫が絶滅の危機に瀕していること。

特に、湿地性・草原性種の衰退が顕著である。例えば、湿地のユウスゲやノハナショウブ群落を主な生息地とするフサヒゲルリカミキリは、1952年を最後に記録が途絶え、すでに県内では絶滅してしまったと考えられている。また、湿地を中心に分布するコヒョウモン、池沼を中心とした里山水辺環境を生息地とするタガメ(すでに絶滅している可能性も)やゲンゴロウ・ミズスマシ類、トンボ類なども減少が顕著である。

また、過去には耕作地周辺の草地に広く生息していたゴマシジミが、今では県内の一部の地域でしか確認出来ず、全国的にも激減していることから2016年に環境省の希少野生動植物種に指定された。これ以外の、チャマダラセセリ(絶滅に瀕している)・ホシチャバネセセリなどの草原性チョウ類、アサカミキリなどの草原性カミキリ類、ベニモンマダラ・スキバホウジャクなどの草原性ガ類なども、軒並み生息地数と個体数が減少の一途をたどっている。

第二は、南方系種の分布拡大と北方系種の衰退。

南方系種の分布拡大としては、1980年以降のクロコノマチョウ、1998年以降のツマグロヒョウモン、2003年以降のナガサキアゲハ、2008年以降のヨコズナサシガメのように、かつて県内にほとんど見られず定着していなかったと考えられる種が急速に分布を拡大・定着してきていることが挙げられる。一方では、北方系の種がより標高の高い一部の地域でしかみられなくなってきている。例えば、2000年頃までは、標高約1,000m以上の山地帯から亜高山帯に分布していたギンボシヒョウモンは、今ではほとんど亜高山帯でしかみられなくなっている。似たような現象は、フタスジチョウなどでもみられ、もともと亜高山帯以上を生息地としている「高山蝶」のほとんどでも、生息地の高標高化と縮小が見られることから、近い将来の絶滅が危惧されている。

第三は、シカの食害等による植生の変化に基づいた衰退。

最も代表的な例は、コヒョウモンモドキであろう。亜高山帯の草原環境にすむ本種は、クガイソウを食草としているので、櫛形山・甘利山・秩父山系が主な生息地であった。しかし、近年、シカの食害のため目に見えてクガイソウが減少し、シカ柵などで保護された場所に残るクガイソウ群落で辛うじて生き残ってきたものの、近年はそうした個体群にも絶滅の可能性が出て来ている。また、高山蝶であるタカネキマダラセセリは、イワノガリヤスを主な食草としているが、その代表的な生息地だった南アルプス大仙丈沢では、一時期激減した。シカの食害が主な原因となってイワノガリヤス群落と吸蜜植物の花の衰退が起こったためであろうか、近年の記録は得られていない。

また、八ヶ岳や富士山などを含む多くの草原環境で、花がほとんど見られなくなっている場所が増えており、これが多くの場所での草原性吸蜜昆虫の衰退につながっていると考えられている。

第四は、人為的な外来種の侵入と分布拡大。

山梨県内で、人為的に放された種が野外で定着してしまった最初の例としては、1980年大月市内に放チョウされ大きな話題となったホソオチョウが挙げられる。その後本種は、自然か人為かははっきりしないが甲府盆地周辺にまで分布を広げたものの、いつのまにか衰退し、今では一部地域に辛うじて残っているのみになっている。

最近の例としては、ムラサキツバメとアカボシゴマダラが挙げられる。ムラサキツバメは、静岡県内での分布拡大の情報を元に県内で調査が行われ、2002年以降県南部から甲府盆地のマテバシイ植栽地で確認されている。静岡県内から飛来した個体によるものか、植栽されたマテバシイに蛹などが着いていて運ばれたものかは不明であるが、継続的に発生している場所がみられることから県内に定着したものと考えられている。アカボシゴマダラは、人為的に神奈川県内に放されたものが、食樹のエノキが低山地に広くみられることから関東地方各地に分布を拡大し、2015年以降は県内の南部から甲府盆地及び周辺の、低山地から山地の広い範囲で記録されるようになっており、同じエノキを食樹とする近縁のゴマダラチョウとの競合も懸念されている。

この様に、意図するしないに限らず、人為的な要因で山梨県内に侵入し、分布を拡大する昆虫は今後も増加することが予想される。

3 調査概要

前回の山梨レッドデータブック 2005 掲載種を中心に、環境省のレッドデータブック掲載種を加え、過去のデータと現地調査結果を基にレッドデータブック掲載候補種の絞り込みを行った。

この候補種を中心として、チョウ類については過去の旧市町村別の記録一覧表を基に、次の現地調査の結果を加えて現状を把握するとともに、年代による減少率も算出し、定量的要件の資料とし、定性的要件も加えてランクを判定した。他のグループは定量的なデータがないため、過去のデータに次に記述する3年間の現地調査結果を加えて、定性的要件を基に掲載種を決定するとともに、ランクを判定した。

平成 27 年度から現地調査を開始し、7 月から 18 名の調査員の体制で県内全域を対象に調査を開始し、平成 29 年度まで継続した。特に今回は、衰退が著しいと予想されながら現状の調査が不完全であった高山性の種を中心に、捕獲許可申請を行い、南アルプス、八ヶ岳や富士山などの亜高山帯から高山帯の高山性種と、中山間地に生息し近年の記録が少なくなっている里山環境にすむ種に重点をおいて調査を行った。

4 選定結果

チョウ類は、比較的過去の記録がしっかりしているため、前回の山梨県 RDB2005 作製時に作成した山梨県主要蝶類確認年表を毎年改定しているが、この表を基に種ごとに記録のある旧市町村数を数え、1990 年まで、2000 年まで、2010 年まで、そして現在まで、それぞれの消滅率（残存率）を計算し、これに個々の種の定情的要件を考慮してランクを決定した。たとえば、アサマジミは、残存率が 39% で定情的要件からランク付けすると NT（準絶滅危惧）であるが、各生息地での個体数の減少が顕著であることから VU（絶滅危惧Ⅱ類）とした。一方、いわゆる「高山蝶」の一種でもあるオオイチモンジは、ここ数十年以上記録がないが、食樹のドロノキは南アルプスの野呂川沿いに散在しており、環境は大きく変化していないと考えられることから DD（情報不足）とした。チョウ類全体では、絶滅 3 種（ウラナミジャノメ・ヒョウモンモドキ・オオウラギンヒョウモン）、絶滅危惧ⅠA 類 7 種（タカネキマダラセセリ・ゴマシジミ・シルビアシジミなど）、絶滅危惧ⅠB 類 13 種、絶滅危惧Ⅱ類 12 種、準絶滅危惧 4 種、情報不足 2 種とした。他に絶滅のおそれなくとも分布上注目すべき種あるいは本県を代表する種として注目種 3 種、絶滅危惧地域個体群 1 種を選定し、全体としては新たに 16 種（個体群）を加えた 45 種（個体群を含む）を選定し、前回の 30 種から大幅に増加した（サトキマダラヒカゲは今回ランク外とした）。更に、ガ類については日本蛾類学会会長の岸田泰則氏に監修と原稿の執筆を依頼し、Ⅰ類 2 種、Ⅱ類 14 種、準絶滅危惧 13 種計 29 種を加えて、チョウ目全体として合計 74 種（個体群）を選定した。

カミキリムシ類は他の甲虫類と併せコウチュウ目とし、古い記録がありながら 60 年以上全く記録がないフサヒゲルリカミキリを、他県における衰退状況をも考慮して絶滅と判断した。その他、ほとんどのコウチュウ目は、ランクを特定するのに足る定情的なデータがほとんどないので、ホストの樹種が限られるものや生息環境が限定されるものなど、その残存状況を勘案し、定情的要件を基にランクを決めた。コウチュウ目全体では、絶滅 1 種、絶滅危惧ⅠA 類 7 種、ⅠB 類 5 種、Ⅱ類 4 種、準絶滅危惧 11 種、情報不足 5 種、要注目種 1 種とした。

トンボ類（トンボ目）も同じくランクを特定するのに足る定情的なデータが極めて乏しいが、生息環境の変化や調査頻度なども考慮しながら定情的要件を基に判定した。例えば、ハッチョウトンボは、35 年以上記録がなく絶滅の可能性が高いものの、環境面や種の移動性などから絶滅と判定しにくい面が残っているので絶滅危惧ⅠA 類として扱い、近年県内で初めて記録されたが生息環境の悪化が懸念されるマダラヤンマは、確認地点が激減しているモートナイトトンボとともにⅠB 類とし、その他Ⅱ類 5 種、準絶滅危惧 3 種、情報不足 5 種を選定した。

その他の昆虫類もランクを特定するのに足る情報が乏しいため、環境省レッドリストに掲載されている種を中心に、絶滅危惧ⅠA 類は、タガメ・アカハネバツタの 2 種、Ⅱ類 1 種、準絶滅危惧 3 種、情報不足 5 種を選定するに留めた。アカハネバツタは県内では未記録であったが、今回の現地調査で 2017 年に確認された。全国的にも生息が確認されているのが 4 県のみで生息範囲も非常に限られていることや、山梨県ではこのレッドデータブックで初めて発表されることからⅠA 類として新たに加えた。また、絶滅のおそれはないものの要注目地域個体群として、特異な遺伝的変異をもつ個体群としていわゆるミカドミンミンと、富士山・南アルプス・八ヶ岳の高山帯に孤立して生息する高山性バツタ 3 亜種（3 個体群：フジコバネヒナバツタ・アカイシコバネヒナバツタ・ヤツコバネヒナバツタ）の 4 亜種（4 個体群）を選定した。

結果的に昆虫類全体では、絶滅（EX）4種、絶滅危惧ⅠA類（CR）17種、絶滅危惧ⅠB類（EN）20種、絶滅危惧Ⅰ類（CR + EN）が2種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）36種、準絶滅危惧34種、情報不足17種、絶滅危惧個体群1種、要注目種4種、要注目地域個体群4種（亜種を含む）となった。

5 減少の主な要因と今後の保護策の提言

前記のような昆虫相の変化で、今回のレッドリストに掲載された各種の昆虫が、現在の絶滅が危惧されるかそれに近い状態まで減少した要因をまとめると次の3つが大きいと考えられる。

第一に考えられる要因は、**里山環境の変質と減少**である。これは、昭和30年代以降の高度経済成長期からの産業構造と生活の変化にもなって起こったと考えられるが、特に湿地環境の減少は、湿地帯の開発、水田での農薬の使用、溜め池の減少、さらにコイをはじめ淡水魚の養殖・外来魚の放流などによって、ゲンゴロウ類やトンボ類をはじめとした、昔は田圃やその周辺の水辺環境に普通にいた昆虫の生息環境が変質・減少したり、無くなってしまったことが大きいと考えられる。また、草原環境の減少は、半自然草原の面積が狭くなっているのと同時に、畑や田の畦などの狭くても様々な昆虫の住んでいた草が、開発などで無くなったり、外来植物の侵入で植生が変化したり、草が放棄されて藪から林になってしまったりして、草地環境自体が少なくなってしまうのが大きいと考えられる。

第二に考えられる要因は、**地球規模の気候変動（温暖化）**の影響である。上記の南方系種の拡大と北方系種の衰退の大きな原因として、気候変動、特に温暖化によって生息環境が変化してしまったことが大きく影響していると考えられる。さらには、温暖化で様々な外来動植物が侵入・定着することで、南方系種に有利な、北方系種には不利な環境が増えてきていることも影響している可能性が高い。

第三に考えられる要因は、**シカの食害などによる植生の変化**である。上述したように、絶滅が危惧される昆虫では幼虫の食餌植物やホスト、成虫の吸蜜植物などとして重要な植物が、シカを主とした食害で極端に減少した場合、そこには住めなくなってしまうと考えられる。これは、丹沢山系や日光、紀伊半島大台ヶ原などシカの密度の高い場所では、林床植物のほとんどがシカの好まない種だけの単調な植生になり、昆虫相が貧弱となってしまったことが指摘されていることからいえるようである。県内でも、南アルプスなどでは高山帯まで侵入したシカによる、昆虫だけでなく高山植物や高山鳥ライチョウなどへの影響も指摘されている。

このような様々な要因で、生息地数や個体数が減少し絶滅危惧種となった昆虫を、保護・保全するにはどうしたらよいかを考える場合、非常に大きな課題が目前に立ちだかっていると感ぜられる。なぜならば、これらの要因が産業構造や生活の変化、シカの食害といった日本国内に共通する要因であったり、地球規模の気候変動という大きな流れによるものだからである。しかし、だからといって諦めてしまうのではなく、池沼の水質改善、農薬使用の抑制等はもちろん、場合によっては草刈りのような補助的手段を加え、人々の生活の中で少しでも絶滅危惧種の生息環境が持続可能な状態を保てるように配慮し、絶滅にいたるスピードを緩め、絶滅を回避し、ひいては、絶滅危惧種と共存できる可能性を高めることが必要になろう。その為には、まず、なぜこれらの種が絶滅に瀕しているのか、どのような環境がこれらの絶滅危惧種に必要なのかを、広く一般の方々に知って頂くことが大事である。そうした意味でも、今回のレッドリスト及びレッドデータブックの改訂とその周知の努力はとても重要であると考えられる。

山梨県希少昆虫調査会 渡邊通人

ウラナミジャノメ日本本土亜種 チョウ目タテハチョウ科

Ypthima multistriata niponica

2018：山梨県カテゴリー
絶滅 (EX)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅 (EX)

種の解説 開張 30mm程の小型のジャノメチョウ科の蝶。本州、四国、九州に分布するが、山梨県市川大門町が北限。似た種にヒメウラナミジャノメがいるが、これは北海道まで全国に分布する。ヒメウラナミジャノメは後翅裏面に5個の目玉模様があるが、ウラナミジャノメでは3個しかない。

分布 本州、四国、九州に分布するが、本州の東限は小田原市。小田原市から富士川沿いに分布域を形成し、四尾連湖が北限。四国、九州では、平地、低山地に広く分布する。

生息環境 ヒメウラナミジャノメと混生することが多いようで、食草のササクサなどイネ科の雑草がある場所、ヒメウラナミジャノメより明るいところを好むようである。

生息状況及び危機要因 山梨県内では、旧市川大門町四尾連、旧下部町、旧六郷町、旧中富町等の記録があるが、いずれも1950年から1960年代のもので、1973年下部町のものが最も新しいものである。以後40年以上記録がない。この間多くの人が調査を試みているが目撃記録すら得られていないので、絶滅したものと判断される。原因は種々あるが、全国的に産地が局地的であることなどから、生息環境の変化、特に人為的な開発などによることが原因と考えられる。低山帯のやや開けた草地は、多くの場合、道路、宅地開発などの影響を受け易く、各地で減少または絶滅の状況である。

特記事項

執筆者 瀬田 貴

ヒョウモンモドキ チョウ目タテハチョウ科

Melitaea scotosia

2018：山梨県カテゴリー
絶滅 (EX)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧ⅠA類 (CR)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧ⅠA類 (CR)

種の解説 開張約 50mm。翅表はオレンジ色を基調として、黒斑が翅の中央部から波模様を描く。飛び方はヒョウモンチョウ類に比べるとやや緩やかであるが、コヒョウモンモドキよりはずっと敏速である。アザミ類、オカトラノオ、ナンテンハギなどの花で吸蜜するほか、湿った路上があると吸水行動も見られる。成虫は年1回の発生で、県内では6月上旬から出現して7月まで見られた。幼虫の食餌植物はタムラソウなどのアザミ類が知られている。

分布 国内では本州に分布し、関東・中部地方と中国地方に分布圏が分かれていたが、関東・中部地方の個体群は絶滅したと考えられている。県内でも過去に15の市町村（合併後、11市町）から記録が得られていたが絶滅したと考えられる。遅くまで記録があった主要生息地は、甲府盆地北部と南部の低山帯である。

生息環境 本県での主要な生息環境は、標高 500m ~ 1000m にかけての低山帯で、雑木林などの中に見られる、食草のタムラソウ、蜜源植物のアザミ類・オカトラノオなどが豊富に見られる開放的な湿性草地であった。このような環境は伐採地や植林地に形成されることが多く、晩年の記録の多くは伐採地や幼齢植林地に形成された草地から得られている。

生息状況及び危機要因 県内で過去に記録のある市町村を列挙すると、旧小淵沢町、旧長坂町（八ヶ岳山麓生息地）、旧明野村、韮崎市、旧双葉町、旧敷島町、甲府市、旧春日居町、山梨市（甲府盆地北部生息地）、旧市川大門町、旧六郷町、旧下部町（甲府盆地南部生息地）、大月市、都留市、富士吉田市（郡内生息地）である。このうち都留市の1件の記録を除いて、甲府盆地北部生息地だけが1980年代から1990年代前半まで生息確認記録が存在する。しかしこの地域も1990年代後半から全く記録がなく、絶滅したものと判断される。

特記事項

平成 23 年に環境省の種の保存法による国内希少野生動植物種に指定され、採集や標本の販売・移動等が禁止されている。

執筆者 北原正彦

オオウラギンヒョウモン

チョウ目タテハチョウ科

Fabriciana nerippe

2018：山梨県カテゴリー
絶滅 (EX)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IA 類 (CR)

種の解説 ヒョウモンチョウ類の中では大型で、開翅長は雄が 60～65mm、雌が 70～80mm。翅はオレンジ色の地色に黒斑が散在し、後翅裏面亜外縁の銀色紋が M 字形状に縁取られているのが本種の特徴。飛び方は敏速で力強く、各種の花で吸蜜することが知られている。成虫は年 1 回、雄が 6 月中旬頃から、雌が 7 月上旬頃から発生し、盛夏には活動を一旦停止した後、9 月頃再び出現し産卵するという。幼虫の食草は、スミレ科のスミレのみ。

分布 国内では、過去には本州・四国・九州の山地に広く分布していたと考えられ、多数の記録が残っているが、1960 年代以降各地で個体数が激減し、絶滅したと判断される生息地がほとんどとなってしまった。現在でも確実に分布が確認されているのは山口県秋吉台や九州阿蘇地方周辺といった限られた地域になっている。県内でも過去に 14 の旧市町村から分布の記録が得られているが、1984 年の記録を最後に、その後 33 年間全く確認記録がないので、県内でもすでに絶滅してまったと判断した。

生息環境 低地から高原にかけての日当たりのよい乾燥した草地・草原に生息する。このような草原は、野焼きや草刈りといった人為的な管理によって維持されている場合がほとんどで、現在も確認されている秋吉台や阿蘇地方も大規模な野焼きが行われることで有名である。

生息状況及び危機要因 県内で得られている分布記録は、ほとんどが戦前の昭和初期の榊田長氏の記録であり、1960 年代以降の確実な採集記録は、次の 3 例のみである。1965 年 8 月 6 日 1 ♀ 山中湖村竈坂峠 (大森重幸氏採集)、1968 年 6 月 30 日 1 ♂ 北杜市武川町 (西村正賢氏採集)、1984 年 7 月 10 日 1 ♂ 北杜市長坂町長坂下条 (猪又敏男氏採集：巻頭写真)、それ以降は全く記録がない。最後の記録から 33 年間記録がないことから、県内では絶滅と判断した。

特記事項

執筆者 渡邊通人

タカネキマダラセセリ赤石山脈亜種

チョウ目セセリチョウ科

Carterocephalus palaemon akaishianus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2005：山梨県カテゴリー
要注目種 (N)

種の解説 開翅長 30mm 程の小型のセセリチョウ。黒色の地色に黄橙色の斑紋が散在している。高山蝶として知られ、卵から成虫になるのに足かけ 3 年を要するとされる。最初の年は 3 令まで育て越冬し、翌年は 5 令で越冬、3 年目の夏に羽化するという。

分布 日本国内では、本州中部の高山帯のみに分布する高山蝶。北アルプス穂高岳、槍ヶ岳、常念岳など限られた地域と、南アルプスに生息する本亜種は仙丈岳周辺と北沢峠までを含む北岳大樺沢に記録がある。

生息環境 標高 2000 m 前後のイワノガリヤスの生えた日当たりの良い草地に生息する。このような環境は、南アルプス仙丈岳周辺では、多くは沢筋の急傾斜地にあり、面積的には狭く、また、雪崩の影響を受けやすい環境であり、不安定な箇所が多い。

生息状況及び危機要因 過去には、仙丈岳大仙丈沢に記録が多かったが、2000 年以降シカの食害や雪崩によると思われるイワノガリヤスの減少に伴い少なくなって、2010 年以降の記録がない。古くは、仙丈岳よりやや離れた野呂川林道での記録もあったが、ここ 20 年以上新たな記録が得られていない。北岳大樺沢やイワノガリヤスが復活した大仙丈沢での複数回の調査でも記録が得られなかったことから、地球の温暖化など気候の変動により、北方系で氷河期の生き残りと考えられる本種の生息地が標高の高い狭い範囲に限られてきている可能性が高い。このような状況から、環境省レッドリストでも 2017 年版で、絶滅危惧 II 類から I A 類にランクアップされた。幸いにして 2016 年に小仙丈沢で採集されたという情報を得ているので、これまで知られる生息地以外の、人が容易に入れないような沢状部源頭付近の草付きを中心に、辛うじて生き残っているのではないかと期待される。

特記事項 定量的要件 ②

執筆者 渡邊通人

ゴマシジミ 関東・中部亜種

チョウ目シジミチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

Phengaris teleius kazamoto

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧II類 (VU)

種の解説 大型のシジミチョウで、裏面にゴマ状の黒斑が散在する。翅表は青色から黒色まで地理的変異が著しく、同じ地域でも変異がある。食草はバラ科のワレモコウで、若～中令までは蕾の中で生活するが、その後シワクシケアリによって巣の中に運ばれ、その幼虫を食べると引き替えに蜜腺から蜜をアリに与えるという捕食的共生関係で育つという特異な生活史をもつ種。成虫は7月下旬から現れ、8月上・中旬が最盛期となる。シワクシケアリの巣内で幼虫越冬するという。

分布 日本国内では北海道、本州、九州にまで断続的に分布する。県内では、里山の雑木林やその周辺の草地に多く、ほぼ全域に分布していたが局所的で、近年では、県北西部と富士山北麓の一部に記録があるのみになってしまった。

生息環境 ワレモコウの生えている日当たりの良い乾燥した草原であるが、草刈り・火入れなどの人為的働きによって保たれてきた二次の草地がほとんどである。

生息状況及び危機要因 富士山北麓の半自然草原の梨ヶ原では毎年安定して発生が見られるが、生息地・個体数ともに激減している。近年、個体数が減少するのに反比例して採集者が多数全国から集まっていた。これが、本種の個体数減少に拍車をかけたことは否めない。国内希少野生生物種に指定されて少し改善したが、個体数の減少は続いている。富士山麓以外の生息地でも激減しており、辛うじて残っていた県北西部の一部地域では、日本チョウ類保全協会と地元が協力して草刈り等の保全活動を続けているが、絶滅に瀕している。

特記事項 定量的要件① 平成28年に環境省の種の保存法による国内希少野生動植物種に指定され、採集や標本の販売・移動等が禁止されている。

執筆者 渡邊通人

シルビアシジミ

チョウ目シジミチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

Zizina emelina

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

種の解説 開翅長8～14mm程の小型のシジミチョウの一種。雄の翅表は紫青色に黒の縁取りがあり、雌の翅表は黒褐色で、前翅基部に弱い青色斑がでる。裏面は共に灰白色で黒色点列を有する。成虫は多化性で4月下旬から10月上旬の間に、地域によって3～6回発生すると思われる。夏から秋にかけて個体数が増加する。本県では、5～11月に見られ、年3～4回の発生と考えられる。幼虫の食草は主にミヤコグサで、他県で記録のあるシロツメクサには産卵の記録はあるものの、幼虫は見つかっていない。越冬態は幼虫。

分布 国内では、栃木県を北限として鹿児島県まで分布する。県内では、富士川の支流の釜無川と笛吹川の合流点付近から釜無川の開国橋に至る間の河川堤防でのみ発生し、甲府盆地南西部の極めて狭い範囲で河川に沿った線の分布をしている。

生息環境 一般に、河川堤防や河川敷、道路法面や溜池の堤体といった人工的要素の強い環境下において、食草ミヤコグサの混じる草丈の低い草草が生息環境となっており、本県においてもこのような環境のある一級河川の堤防や河川敷が、本種の生息環境となっている。

生息状況及び危機要因 県内では、もともと生息範囲が限られていたが、その生息環境もより狭くなり、確認出来る個体数も著しい減少傾向にある。生息地である河川堤防では、芝の植え付けが周期的に移動しながら行われると同時に、毎年数回の定期的な草刈りが行われることで、食草ミヤコグサが生育できる明るい草丈の低い草草環境が保たれている。本種の生息は、このような人為的管理に強く依存しているといえる。

特記事項 定量的要件①

執筆者 岩崎 央

ツマグロキチョウ

チョウ目シロチョウ科

Eurema laeta betheseba

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

種の解説 開翅長、夏型では 30mm 程、秋型では 35mm 程。夏型では雄の地色は黄色、雌は全体に黒い鱗粉が荒く散布され、くすんだ淡黄色に見える。秋型では雌雄とも濃黄色で大差がなく、前翅先端が尖る。多化性で年数回の発生と推定される。成虫で越冬し、春季に産卵、第 1 化は 5 月から 6 月に姿を見せる。幼虫の食草としてはマメ科のカワラケツメイ・アレチケツメイが知られている。

分 布 国内では本州、四国、九州に分布。県内では、古くは秋型の記録が各地に散在するが、最近の記録は、南部町を中心とした県南部に限られ、発生地も県南部のみと考えられる。

生息環境 河川敷や堤防及び周辺の草地に生息。

生息状況及び危機要因 食草であるカワラケツメイが見られる河川敷との結びつきが強い。最近、県内でも、外来植物のアレチケツメイでの発生が確認されており、台風などの自然災害でカワラケツメイ群落が流出しても、アレチケツメイで発生を継続している場所が見られるようになっている。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 秋山 隆

チャマダラセセリ

チョウ目セセリチョウ科

Pyrgus maculatus maculatus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

種の解説 開翅長約 25mm の茶系の小さなセセリチョウである。雄雌の形態的な差異はほとんど無い。現在残された県内唯一の生息地富士山では、春型は 5 月初旬から姿を見せ始め、6 月上旬まで出現するが個体数は非常に少ない。稀に 7～8 月に夏型がみられることもある。食草としてはバラ科のミツバツチグリ、キジムシロ、シロバナノヘビイチゴなどが知られている。

分 布 国内では、北海道中央部、本州（東北・中部山地）、四国に残存的に分布するが、近年、全国的に減少し絶滅してしまった地域も多い。県内では、過去には甲府盆地周辺、富士山麓などで多くの記録があったが、近年は富士山北麓から記録されているのみである。富士山麓以外では絶滅してしまったと考えられる。

生息環境 食草であるミツバツチグリやキジムシロが繁茂している、裸地のある草原環境が主な生息環境である。

生息状況及び危機要因 富士山麓でも 2000 年頃までは伐採地を中心として、生息地が散在していたが、2000 年以降は、半自然草原の数ヶ所の一部に辛うじて生き残っていた状況で、2016・17 年には確認記録は得られなかった。非常に危機的状況であるが、ここ数年は人工林の伐採が進んでいるので、これら山地帯から亜高山帯下部の伐採地を中心に生き残っていることを期待したい。

特記事項 定性的要件①②③

執筆者 渡邊通人

ギフチョウ

チョウ目アゲハチョウ科

Luehdorfia japonica

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧ⅠA類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 開翅長 50～60mmで、黄色地に黒のだんだら模様。県内では早い年は3月下旬から出現する。幼虫はウマノズクサ科のランヨウアオイ、カギガタアオイ等を食べているが、本県ではまれにフタバアオイに産卵され、幼虫も確認されている。越冬態は蛹。

分布 日本固有種で本州のみの分布。秋田県が北限、太平洋側の東限は東京都の多摩丘陵であったがすでに絶滅、南限は山口県及び和歌山県だったが、後者はすでに絶滅、西限は山口県山口市付近。近縁のヒメギフチョウとは一般にすみ分けて生息するが、秋田県、山形県、長野県の一部で混棲している。本県でも本栖湖北岸が混棲地として知られているが、最近の記録はない。山梨県の残された生息地は富士川水系の局限された地域である。

生息環境 低山地の落葉広葉樹林、スギ、ヒノキ、アカマツの針葉樹林の林縁、林内に生息している。

生息状況及び危機要因 落葉広葉樹林の減少、スギ、ヒノキの人工林の荒廃等で食草であるカンアオイ類が生育しにくくなっている。他県同様、県内も個体数が年々減少し、確認出来る場所も非常に限られて来て危機的状況である。

特記事項 定性的要件①②③

執筆者 秋山 隆

コヒョウモンモドキ

チョウ目タテハチョウ科

Melitaea ambigua nippona

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧ⅠA類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

種の解説 開翅長 30～40mmのヒョウモンチョウの仲間。草原の中を緩やかに飛び、花から花へと移動する。日照に敏感で、日が陰るとすぐに草間に静止する。成虫は夏1回発生し、卵は食草クガイソウに数十～二百卵程まとめて産み付けられ、幼虫も一群となって成長する。成長した幼虫は分散し、単独生活になる。越冬態は幼虫。越冬後は、オオバコ・ママコナ・オトコヨモギなどクガイソウ以外の植物も食べて蛹化するといわれる。

分布 国内では、関東地方から中部山岳地帯にかけて極めて限定された地域のみで生息する。県内では、南アルプス前衛山系、鳳凰山系、秩父山系、八ヶ岳などの亜高山帯から山地帯を中心に記録がある。かつては、御坂山系の三ツ峠からも記録されていたが、記録が途絶えて約50年が経過した。

生息環境 食草クガイソウが繁茂する亜高山の自然草原が本種の主な生息環境である。時に、高標高の伐採跡地に一時的に発生することもある。県北部、西部を中心とした山岳部に産地が点在し、まとまった個体数が記録されている。

生息状況及び危機要因 生息地においては、発生の最盛期には多くの個体がまともてみられるが、希薄な個体数では個体群が維持できないらしく、一旦減少し始めると瞬間にその姿が消え、いくつもの産地がなくなりつつある。発生活長の波も激しく、伐採跡地で発生した場合10年程で消滅してしまうので、生息域での林業活動にその生息が依存する傾向がみられる。近年は、シカの食害によるものと考えられるクガイソウの減少が、本種の減少にも大きく影響していると思われ、現在では確認されている生息地が非常に限られている。

特記事項 定性的要件①②③

執筆者 岩崎 央

コヒョウモン

チョウ目タテハチョウ科

Brenthis ino tigroides

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 ヒョウモンチョウ（ナミヒョウモン）とコヒョウモンの2種は、ヒョウモンチョウ類の中ではやや小型で、後翅裏面にややぼけた青白色の帯があることで、他のヒョウモンチョウ類とは区別できる。しかし、この2種は酷似し、ヒョウモンチョウの翅表の地色は赤味の弱い橙黄色で、前翅外縁はより直線状に近く、翅表の黒斑は小さい傾向があることで区別できる。両種の間には野外で自然雑種も確認されており、時に区別が困難な個体も見られる。食草はオニシモツケとワレモコウ。成虫は7～8月に発生し、クガイソウやオニシモツケの花などで吸蜜する。

分布 北海道全域と本州の群馬・新潟・長野・山梨・岐阜・富山の各県に記録があり、高標高の山地渓谷に生息する。北海道のものは別亜種とされる。県内では、八ヶ岳高原、旧須玉町増富・木賊平、帯那山、乙女高原などが産地として知られていた。

生息環境 湿性の山地草原を好むが、このような環境は県内には少なく、植林や樹林の伐採などで生息地が失われているところが多い。シカの食害により食草がみられなくなったと思われる場面もみられている。

生息状況及び危機要因 過去に記録のある旧須玉町増富、帯那山、乙女高原からは20年以上前から記録されなくなり、最近では、残された県内の生息地でも、主な食草であるオニシモツケが少なくなったのか、個体数が激減している。近年確認されているのは八ヶ岳高原のみで、旧須玉町木賊平からも確認されなくなり、危機的状況である。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 瀬田 貴

ホシチャバナセセリ

チョウ目セセリチョウ科

Aeromachus inachus inachus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

種の解説 日本産セセリチョウ科の中では最小型種。翅の表面の地色は、褐色味を帯びた黒色で、前翅表には細かい白点列がある。低山地から山地にかけての草地に生息し、年1回の発生であるが、甲府盆地周辺から県南部の低山地では2回発生する場所もある。幼虫の食草はオオアブラススキ。越冬態は3齢幼虫という。

分布 本州と対馬に分布する。本州では青森県から関東、中部の山地、低山地に広く分布し、近畿地方は空白地帯となり、中国地方の山地に再び現れる。対馬には分布するが、四国、九州には分布しない。いずれの地も産地は局限され個体数も少ない。県内では、釜無川・富士川以西を除く広い範囲の低山地から山地に記録がある。

生息環境 低山地の林縁の草地、山地の疎林及び周辺の草地に生息する。いずれの地も日当たりの良い場所であるが、開放的な草原環境より、食草のオオアブラススキが繁茂し、近くに樹木が散在する疎林の環境を好む。

生息状況及び危機要因 全国的に有名であった甲府市近郊の年2回発生する地からは、1970年以降姿を消した。それ以外の甲府盆地周辺から県南部地方にかけての中山間地の里山環境でも生息地数と個体数が激減し、現在も記録のあるのは数ヶ所に留まっている。2000年頃までは比較的安定して見られた富士山北麓の半自然草原でも、一部地域からはほとんど見られなくなり、現在でも確認できる範囲や個体数はともに激減していることから、絶滅が危惧される状況である。

特記事項 定性的要件①②③

執筆者 渡邊通人

クロシジミ

チョウ目シジミチョウ科

Niphanda fusca

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

種の解説 成虫は、開張♂32～35mm、♀35～40mm。翅表は暗褐色の地色で雄は弱く紫藍色を帯びる。裏面の地色は白色の強いものから褐色がかかった灰白色まで変異が多い。年1回6月下旬から8月にみられる。幼虫は、1～2令までアブラムシやキジラミの分泌物を吸汁。2令後期からクロオオアリの巣中に運ばれ口移しで餌をもらい、そのまま幼虫越冬し、翌年6～7月頃蛹化するという養育型共生関係で育つ特異な生活史をもつ。

分布 日本固有種で、本州・四国・九州（対馬を含む）に分布。県内では1950年代の甲府市帯那山の記録をはじめ、釜無川・富士川・桂川などの河川沿いの人家周辺に記録が散在することから、県内の里地・里山に広く分布していたと考えられるが、1990年以降に確認されているのは、4市町村のみで、その生息範囲も局限されていて危機的状況にある。

生息環境 低山地から山地の、コナラやアカマツなどの混生する疎林から草地、ススキ草原などが主な生息環境で、いずれも植生遷移の途中にある人手の加わった不安定な里山環境である。アブラムシやキジラミが多いこと、クロオオアリが生息していることが、生息環境に共通している。

生息状況及び危機要因 八ヶ岳山麓の大泉村から甲府市・旧鯉沢町・旧六郷町・早川町・南部町・旧富沢町の富士川沿い、大月市・都留市の桂川沿い、さらに、旧上九一色村・山中湖村の富士山麓など、広い範囲に記録が散在していたが、里山環境の荒廃とともに急速に生息地を減らし、1990年以降現在までの記録のあるのは、早川町と富士山北麓の半自然草原の一部（富士河口湖町と富士吉田市・山中湖村）のみになっている。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

クロヒカゲモドキ チョウ目タテハチョウ科

Lethe marginalis

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 開長50～55mm程の褐色の地色に複数の眼状紋が目立つタテハチョウ科ジャノメチョウ亜科のチョウである。6月から7月にかけて羽化し、雄は午前と夕方近くに活発になり林縁の草地でナワバリを持つ。特に夕方近くは非常に活発になり、目にする事が多い。雌の産卵もこの時間帯に行われる。また、樹液にも好んで飛来する。幼虫はイネ科のススキ類で見られるが、カヤツリグサ科のアブラガヤなどにも産卵するのを観察している。

分布 本州、四国、九州に分布するが、いずれも産地は極めて局地的である。かつて本県での生息地は甲府盆地を取り囲むように分布していたが、笹子峠より東部と富士山周辺、南部町以南などからは記録が無い。ここ数年では甲斐市（旧敷島町）、市川三郷町（旧市川大門町）、身延町（旧下郡町）の3か所で記録が得られている。

生息環境 管理された薪炭林とその林縁部、そしてナワバリが形成出来るススキ等の草地や空間のあることが生息地の条件となる。日中は、クヌギ等の樹液で吸汁したり、林床で休んだりしていることが多い。また、林縁の草地に生えるススキ類は、本種の食草でもある。つまり、里山の雑木林の環境と林縁環境との2つの組み合わせが本種には必要と考えられる。

生息状況及び危機要因 甲府盆地周辺に多く生息していた本種だが、近年では甲斐市の旧敷島町、市川三郷町の旧市川大門町、身延町の旧下郡町の3か所でしか確実な記録がない。雑木林の管理放棄やそれに隣接する農地の荒廃が減少の原因と考えられるが、特に県内の生息地では農地の荒廃につられ、農道や林道の荒廃も進み、藪になったり森林化したりして、本種の活動する空間が狭められていることが原因として大きいと判断される。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 杉村健一

キマダラルリツバメ チョウ目シジミチョウ科

Spindasis takanonis

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 二本の尾状突起を有し、裏面は黄地に黒条の入った斑模様をしているシジミチョウの仲間。♂の翅表は基半に紫色の光沢を帯びるが♀の翅表にはそれがなく、暗褐色。紫色部の広さは地理的にも、個体的にも変異が著しい。桜などの古木に巣をつくるハリプトシリアゲアリと共生している。成虫は6月中旬から7月上旬にかけて発生、朝、夕に活発に活動する。

分布 国内における産地は、本州各地に及んでいるが、実際の生息地は局地的である。県内では上野原町、都留市等の桂川沿い、及び多摩川源流域に生息しているだけである。

生息環境 サクラの古木が生えている社寺の境内・参道、学校の校庭、河川敷などで、周辺に生育するヒメジョオンの花などに飛来することが多い。

生息状況及び危機要因 1980年代前半までは、旧上野原町や都留市近郊でも多数確認できたが、その生息環境の減少とともに激減している。発生最盛期に出向いてもまれにしか確認できない状況で、旧上野原町ではようやく2017年に少数が再確認された状況で、発生木が切られてしまうと大きな打撃を受け絶滅してしまう可能性が高い。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 外川倍美

カラスシジミ チョウ目シジミチョウ科

Fixsenia w-album fentoni

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 開翅長30mm前後で、雌の方がやや大型である。雌雄とも地色は暗褐色で、雄は前翅中室外端に半円形の性標がある。成虫は年1化の発生で6月頃より出現する。越冬態は卵で、食樹の休眠芽の基部、枝の分岐部に産み付けられる。食樹はハルニレ、スモモ等が知られる。

分布 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では限られた産地のみでの記録で、都留市、大月市、鳴沢村、旧芦川村、旧須玉町、長坂町から記録されているが、最近では旧須玉町、都留市など一部でしか確認されていない。

生息環境 生息地は主な食樹であるハルニレの分布と良く一致する。バラ科のサクラ属も自然状態で食樹となり、また、スモモ、ズミ、ウメ、アズキなどを食樹に挙げたものもある。日当たりの良い、渓谷や林縁などの花に集まる事が多い。

生息状況及び危機要因 県内で記録されている地域も生息個体数は少なく、今後が心配される。しかしその一方、ハルニレ以外の食樹で発生していると思われる産地も見つかっており、今後さらに新しい産地が見つかる可能性がある。

特記事項 定性的要件①

執筆者 秋山 隆

ミヤマシジミ

チョウ目シジミチョウ科

Plebejus argyrognomon praeterinsularis

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類(EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類(EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧II類(VU)

種の解説 成虫は、開張26～28mmで、雄の翅表は鮮やかな濃水色なのに対し、雌は茶褐色で青藍色の鱗粉が混ざることが多い。裏面は雌雄共に薄茶白色の地に黒と褐色の斑紋が散在する。年3～4回の発生で、4月中旬～10月中旬にみられる。幼虫はコマツナギの葉、花、実を食べ、数種のアリと共生。卵で越冬する。

分布 本州に分布するが、その主要産地は関東、中部地方にあり、東北地方北部、近畿地方以西には分布しない。県内では、釜無川・笛吹川・富士川・桂川などの河川沿いとその上流部の開けた谷、加えて八ヶ岳・富士山の火山草原など旧40市町村から知られていたが、2010年以降も確認されているのは旧12市町村のみである。

生息環境 河川勾配約0.2%以下の礫の多い河川敷の中水位面から高水位面、それら河川につながる山裾の扇状地などの農耕地周辺、さらに火山草原の開けた空間などに繁茂するコマツナギ群落周辺が生息地。食樹コマツナギの周りにススキなど草丈の高い植物が繁茂するようになると幼虫がみられなくなる。成虫も食樹の群落を中心とした狭い範囲にしか生息しない。

生息状況及び危機要因 県内の河川沿いや火山草原に広く分布していたが、1990年以降はそれぞれの場所で生息域が縮小し、釜無・笛吹川沿いの数ヶ所、富士川中流部、富士山麓に記録があるだけであったが、火入れや草刈りの行われている河川敷や草原に分布するので、人の手が加えられなくなった場所では、食樹コマツナギが生育していても、本種は生息できない。そのことが、減少の大きな要因と考えられる。2000年以降その減少傾向が加速され、台風による生息地の流出・変貌も重なったのであろう。現在でも確実に生息が確認されているのは数ヶ所になっており、危機的状況にある。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

アカセセリ

チョウ目セセリチョウ科

Hesperia florinda florinda

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類(EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類(EN)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧(NT)

種の解説 開翅長30mm程で雌の方がやや大型である。雄の地色は赤みの強い茶褐色で、前翅中室下部に黒色の光沢のある性標がある。雌の地色は暗茶褐色で前後翅に黄斑がある。年1回の発生で7月下旬から8月にかけて出現する。越冬態は卵で、食草であるカヤツリグサ科のヒカゲスゲの根元付近に1個ずつ産み付けられる。

分布 国内では、本州中部地方と関東北部の山地。県内では八ヶ岳、秩父山塊、御坂山地、富士山麓の標高1000m前後に分布。ただし、多産していた八ヶ岳・富士山麓などでも個体数が著しく減少している。

生息環境 高原地帯の開けた草原、疎林周辺や林間の草原に見られる。

生息状況及び危機要因 生息地の牧草地化、植林によって草原が減少し、残された草原も草刈りが行われなくなった事により植生遷移が進行したため、本種の生息に適した草原が減少している。絶滅危惧植物となってしまったコウリンカやオカオグルマなど、成虫が好む吸蜜植物の減少したことも、本種の衰退に影響している可能性がある。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 秋山 隆

スジグロチャバナセセリ 名義タイプ亜種 チョウ目セセリチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Thymelicus leoninus leoninus

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 開翅長 25mm程の、ヘリグロチャバナセセリに極めてよく似た小型のセセリチョウで、翅表は黒褐色に橙色の斑紋が広がる。雄は、前翅の中室下方に黒色の細い性標があるので、この性標がないヘリグロチャバナセセリと区別できる。一方、本種の雌は、前翅表中室端外側の黒斑が下まで広がり翅全体に筋が目立つことで区別される。雌雄共に各種の花を訪れるが、訪花以外の時間は、雄が草本上をなめるように雌を探して広く飛び回るのに対し、雌は草むらの葉上などで休止していることが多い。食草はカモジグサやヤマカモジグサが知られる。年1回夏に発生する。

分布 国内においては北海道、本州、四国、九州に局地的に分布。県内では、山地帯を中心に分布し、八ヶ岳から秩父山系、御坂山系にかけて広く分布記録があったが、近年の記録は散在し確認された個体数も少ない。釜無川から富士川の西側一帯の県西部地域は、ヘリグロチャバナセセリの記録はあるものの本種の確実な記録はほとんど知られていない。一方、富士山には分布しないとされたこともあったが、富士山北麓の富士吉田市及び忍野村の一部地域からは記録されている。

生息環境 食草が、低山地から山地帯の草地や明るい林縁部に多いことから、このような環境を好む。主な確認地点は、県北部秩父山系の山麓帯、御坂山系の山麓帯などで、里山の草地から林縁環境に広く生息する。特に、近くに沢や小河川があるようなやや湿気を帯びた環境が好まれる。雄は、林に囲まれたスポット的な草地でナワバリを形成することが多い。

生息状況及び危機要因 1990年代まで、県北西部から秩父山系、御坂山系にかけての山麓に広く分布確認記録があったが、1990年以降個体数が減少し、旧須玉町の一部などでは継続して確認されたが、その他の産地ではほとんど記録されなくなった。しかし、2000年以降、過去に記録のあった甲府盆地北部・桂川沿い・八ヶ岳などの地域から少ないながら記録が得られるようになり、富士山北麓周辺地域の一部では、これまで記録のなかった地点からも記録されるようになっている。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

ミヤマシロチョウ チョウ目シロチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧II類 (VU)

Aporia hippia japonica

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 開張 60mm程。雄の表面は白色の地色。雌は羽化後時間が経つにつれ、雄の求愛行動によって前翅の鱗粉をはがされ半透明で全体に黒ずんでいるものが多い。本州中部地方の山地だけに分布し、高山蝶の一つに数えられている。幼虫の食樹はヒロハノヘビノボラズ及びメギで、孵化した幼虫は糸を吐いて巣を作り集団で生活する。3令幼虫が巣の中で越冬し、翌年終令になってから離散し蛹化する。成虫は、飛翔が非常にゆっくりで、発生地では、個体数が比較的まとまって見られることが多い。

分布 本州中部地方の標高 1500～2000mの山地のみに分布する。高山帯には生息しない。産地は北アルプス、浅間山山塊、八ヶ岳山塊、南アルプスが知られ、いずれの地でも産地は局限される。県内では、八ヶ岳山系から南アルプスとその前衛山系の亜高山帯から記録があったが、現在では、メギを食樹とする生息地櫛形山系からの記録はなく、ヒロハノヘビノボラズを食樹とする八ヶ岳山塊でも絶滅が心配される状況である。

生息環境 山梨県内の産地では、標高 1500～2000mの森林帯の外縁や沢筋のやや開けた場所に生息する。主な食樹のヒロハノヘビノボラズやメギがこのような場所に生育するためと思われる。発生地ではまとまった個体数が見られはするものの、成虫の飛翔は非常にゆっくりであるため、発生地から遠く離れることは少ないものと考えられる。

生息状況及び危機要因 南アルプス前衛の櫛形山系からは姿を消し、甘利山の記録も1980年代から不明。現在は、野呂川の広河原より上流に局地的に残っている。八ヶ岳山塊では、高根町川俣川溪谷及び美ヶ森山周辺からは姿を消し、地獄谷のものは1980年代以後不明。現在は、網笠山付近に生存する可能性が残っているが個体数は非常に少ないと考えられる。富士山、乾徳山、奥秩父などからの古い記録があるが誤報であろう。生息地が植林地であった櫛形山では、食樹の人為的除去（メギはトゲがあり、下刈り等で特に除去されやすい）のほか、採集による圧力が加えられたことも原因になったと思われる。八ヶ岳高根町のものも同様で、植林地では広範囲にわたり一斉に下刈り等を行った場合、ミヤマシロチョウには他地域へ移動していく時間的余裕が与えられないと考えられるからである。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 瀬田 貴

クモマベニヒカゲ本州亜種

チョウ目タテハチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類(EN)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧(NI)

Erebia ligea takanonis

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 裏面の色彩斑紋はベニヒカゲと異なり、雌雄ほとんど同じである。雌は指標の橙色帯が淡色で幅広く、橙色帯中の黒色眼状紋の中心に微小白点をもつことから雄と容易に区別出来る。7月～8月に出現するが、7月下旬～8月上旬が最盛期となる。本種は一代代の完了に2年を要する。

分布 北海道、本州に分布する。本州では中部地方の八ヶ岳、赤石山脈（南アルプス）高地帯、木曾山脈高地帯、飛騨山脈（北アルプス）高地帯、富山県立山、岐阜・石川両県の境の白山などが産地として知られ、垂直分布ではおおそ1800m以上の地域に生息する。しかしベニヒカゲのほうが本種より垂直分布の上限が高く、混生地では本種はベニヒカゲの分布域に挟まれる形となる。

生息環境 1800m以上の高地の草地を飛翔し、各種の高山植物の花を訪れる。お花畑や、沢筋の草地、カールの草地などで見られる。また標高の高い、林道脇の法面の草地などでも見かけることがある。高茎草本類が生える草地で見られる機会が多い。

生息状況及び危機要因 詳しい原因は不明だが、産地が減りつつある傾向にある。南アルプスの北岳のように、高茎草本類の多い環境ではクモマベニヒカゲの個体数も少なくないが、南アルプスでもシカの強い食害をうけ、アザミ類やマルバダケブキが優先する単純な草原に変化した場所では、かろうじてマルバダケブキに訪花する姿が観察される程度である。一方、八ヶ岳山麓では環境が残っているにも関わらず消滅、または個体数が減少した産地が散見される。2000年代以降、本種は全体的に減少傾向にある事は確かである。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 杉村健一

ウラジャノメ

チョウ目タテハチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類(EN)

2017：環境省カテゴリー
なし

Lopinga achine achinoides

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 中型のジャノメチョウの仲間。翅表の地色は淡褐色で、亜外縁部に眼状紋があり、裏面にも同様の眼状紋がある。成虫は、年1回6月下旬～7月下旬に出現する。日中、緩やかに飛翔し、林縁部によく集まる。樹液に來たり、吸水や獣糞に集まったりすることもある。食草としては、イワノガリヤスやヒカゲスゲなどが知られている。

分布 国内では、北海道と本州に分布。本州では、東北地方から関東地方北部・中部地方の山地に分布するが、いずれの産地も局所的。県内では、県北部から大菩薩山系、御坂山系から天子山系、南アルプス及びその前衛山地に記録がある。

生息環境 成虫は、落葉樹林の林床にイネ科やカヤツリグサ科植物が群生する場所で見られる。本州では主に標高1500～2000mの山地帯上部～亜高山帯に生息する。

生息状況及び危機要因 過去に記録のあった南アルプス地域を除く地域からの最近の記録はほとんどなく、確実に生息が確認されているのは、南アルプスの北岳から仙丈岳を中心とした地域の亜高山帯だけである。山地帯上部から記録されていた場所からみられなくなっているのは、気候の温暖化の影響からか亜高山帯に生息地が限られるようになってきているためと判断される。その結果、亜高山帯に本種の好む広葉樹林が残る南アルプス地域に生息が限られて来ているのではないかと考えられ、今後の本種の動向を注視する必要がある。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

フタスジチョウ中部地方亜種

チョウ目タテハチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類(EN)

2017：環境省カテゴリー
なし

Neptis rivularis insularum

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 前翅長22～28mm程のミスジチョウ類の一種で、翅表は黒褐色、裏は赤みを帯びた褐色地に、前翅には2本、後翅には1本の白帯斑を有する。白帯の幅は地域により顕著な変異が見られる事から、日本産は4亜種に分けられている。成虫は年1回、6月中旬～7月下旬に出現。幼虫はバラ科のシモツケ属各種を食し、通常は3令幼虫で越冬するとされている。

分布 国内では北海道から中部地方にかけ分布するが、主に北海道と中部地方山地帯が2大生息圏である。県内では、県南部と北東部を除く、ほぼ1000m以上の山地帯にみられ、富士山麓や八ヶ岳山麓、南アルプス前衛山地からの報告例が多い。

生息環境 ミスジチョウ類の仲間では、最も山地性の強い種で、平地から山地にかけ各地に普通の北海道を除き、本州での生息地は主に1000m以上にある山地の林縁に広がる草原や湿原、または溪谷の露岩地である。生息地では、成虫は各種の花を訪れ吸蜜するが、獣糞や死骸などにも集まる。

生息状況及び危機要因 近年、本州の生息地ではいずれも個体数が減少しており、本県においても報告記録が著しく減少している。これは草原の開発や湿地の乾燥化、溪谷の治山工事に伴う露岩地の消失等による食樹を含む生息環境の悪化が要因とみられ、更にシカの食害による吸蜜植物の消滅なども追い討ちをかけていると思える事から、本種の今後の動向はいずれの生息地も要注意である。南アルプスの野呂川林道沿い、北岳・仙丈岳周辺の山地帯から亜高山帯では安定して発生しているが、富士山北部での本種の記録は非常に少なくなっており、危機的状況である。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 山本俊一

オオヒカゲ

チョウ目タテハチョウ科

Ninguta schrenckii

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
要注目種 (N)

種の解説 開長70mm程の国内最大のジャノメチョウであり、黄褐色または灰褐色の地色に後翅裏面に眼状紋がならぶ。雌の翅形はやや広く翅の地色は淡色、後翅表の黒円紋が大きく目立つ。雄は後翅内縁基部に銀灰色に目立つ性標があるので雌雄の区別は容易である。7月中旬より発生し、日中は林床近くなどに潜んでいるが、朝と夕方近くは活発になり林縁などの開けた空間にも出てくる。驚くと潜るように林内に隠れる。また、産卵もこの時間帯に行われる。

分布 北海道と本州に局地的に分布し、四国と九州では知られていない。本県では北西部のみに記録があり、八ヶ岳山麓では、いずれも現在の北杜市である旧大泉町、旧長坂町、また秩父山地では旧須玉町増富地区で確認されている。しかし、近年では、八ヶ岳での記録は消え、旧須玉町の増富地区に記録があるだけとなっている。

生息環境 山里の休耕地が本種の主な発生地になっている。幼虫は、休耕地に生えたスゲ類等を食べて成長する。成虫は林縁や林内などを潜るように飛び、樹液で吸汁したり林床で休んでいる。夕方近くになると明るく開けた空間に飛び出し、小屋や井戸などの人工物にもよく止まる。林と農地の2つの本種の好む環境を維持していれば、発生が続けられるものと考えられる。

生息状況及び危機要因 旧須玉町の増富地区にあった幾つかの産地のうち、近年確認出来たのは1か所だけである。衰退の要因は林と農地の荒廃と考えられる。休耕地は完全に放棄され樹林化し、日照が遮られ食草のスゲ類が育ちにくくなり生息環境に影響を及ぼしている。また、農道を含めた農地が放棄され藪化し、成虫の飛ぶ空間も狭められている。周辺林の管理も行われていない。それらが本種に適する空間や環境を消滅させつつあるように思える。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 杉村健一

ヒョウモンチョウ本州中部亜種

チョウ目タテハチョウ科

Brenthis daphne rabdia

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 小型のヒョウモンチョウ類で、近縁のコヒョウモンに似るが、一般的に本種の翅表の地色は赤味の弱い橙黄色で、前翅外縁はより直線状に近く、翅表の黒斑は小さい。年1回6～8月に発生する。山地の高原に多く、各種の草花に集まる。近縁のコヒョウモンが湿潤な草原を好むのに対し、本種は乾燥した草原を好む。幼虫の食草はワレモコウ。2令または3令幼虫で越冬するとされているが、北海道や本州の一部では卵越冬が観察されている。

分布 北海道、本州に分布し、本州北部では発生地は局地的でまれである。福島県から本州中部にいたる山地帯に分布が広い。県内では、八ヶ岳から奥秩父山系、大菩薩山系、御坂山系を経て富士山麓にかけての地域に分布記録がある。

生息環境 山地帯の乾燥した日の当たる明るい草地进行を好み、火山性半自然草原から防火帯や耕作地周辺の草地にも生息する。草丈の低い草地より、むしろ、疎林内でススキの株が点在し、食草ワレモコウの多い草地が好まれるようで、そのような環境では、発生地周辺の草地や林縁の各種の花で吸蜜していることが多い。

生息状況及び危機要因 県内においては、甲府盆地及び釜無川以西の南アルプス地域及びその前衛山地や南部地域を除いた広い範囲の山地性草地に広くみられ、場所によってはその個体数も多かったが、2000年代以降急速に生息地が失われてきている。甲府盆地北部山地では2011年、甲府盆地東部山地でも2015年以降記録が途絶えている。現在残っているのは八ヶ岳高原から旧須玉町にかけての地域と富士山北部程度となっている。富士山北部でも、山麓の耕作地周辺の生息地からは確認されなくなり、現在は一部の半自然草原に残されているのみである。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

キマダラモドキ

チョウ目タテハチョウ科

Kirinia fentoni

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
要注目種 (N)

種の解説 開翅長50～60mm程の中型のジャノメチョウの仲間。雄の翅表の地色は黄褐色で黄色斑は不鮮明、雌の地色は淡く、黄色斑が発達する。雄の前翅の形は細長く、雌は幅広く丸みを帯びる。成虫は年1回の発生で、暖地や低山地では6月中旬から、多くの産地は7～8月に出現する。越冬態は幼虫(初令)で、孵化した幼虫は食をとらずそのまま越冬に入るといわれている。越冬後の幼虫は種々のイネ科、カヤツリグサ科を食べる。

分布 国内では、北海道、本州、四国、九州に生息。県内では富士山麓、南巨摩、中巨摩、北巨摩に生息していると思われるが、近年、記録が減少している。

生息環境 低山地～山地の落葉広葉樹林及び周辺の草地、低山帯では湿地を交えた樹林に生息する。また火山草原のふもとに発達した樹林、疎林にも生息する。

生息状況及び危機要因 広葉樹林の減少により生息地が減少していると推定される。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 秋山 隆

ヒメシジミ本州・九州亜種

チョウ目シジミチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Plebejus argus micrargus

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 小型のシジミチョウで、雄の翅表は青藍色、雌は暗褐色で、多くは後翅亜外縁に赤燈色の斑紋列がある。近縁のミヤマシジミ・アサマシジミに似るが、雄では翅表の青色部の色合いと幅が違うので区別できる。雌は3種とも酷似するが、本種の雌の裏面の黒点は白く縁取られることが多い。成虫は、年1回、低地では6月中旬、寒冷地・高地では7～8月に発生する。幼虫はマアザミ・ヨモギなどのキク科、ナワシロイチゴなどのバラ科、ナンテンハギなどのマメ科など様々な植物を食べることが知られている。

分布 国内では、北海道・本州・九州に分布する。本県のヒメシジミは、関東地方北部山地から中部地方に広く分布する亜種に含まれる。県内では、八ヶ岳から県北部～北東部の山地、および富士山北部に記録がある。

生息環境 成虫は、陽当たりの良い草地に好んで生息し、低く緩やかに飛ぶ。低山地～山地の採草地・林縁・農地周辺などの草地にみられる。時に非常に狭い範囲で発生するが、連続して発生できる環境としては、ある程度の面積をもつ草地が必要と考えられる。

生息状況及び危機要因 過去には、県北部一帯の山地、及び富士山麓に広く分布し、場所によってはまとまった個体がみられたが、近年、突然いなくなってしまう産地が増え、残された生息地でも個体数の減少が顕著である。特に、2000年以降は、富士山麓以外では数ヶ所に少数が確認できる程度にまで急減している。過去、場所によっては高密度で確認された富士山北部でも、ある程度の面積のある半自然草原に限られてきて、個体数も減少傾向が顕著で、人家周辺の畑の畦などの草地からは姿を消してしまった。草地の減少と気候の温暖化が影響している可能性が高い。

特記事項 定量的要件① 定性的要件①

執筆者 渡邊通人

ヒメシロチョウ

チョウ目シロチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧ⅠB類 (EN)

Leptidea amurensis

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

種の解説 開張約30mm。翅は全面白色を基調とし、前翅先端部に黒色の紋があり胴体はか細い。飛び方は緩慢で弱々しい。ツルフジバカマ、アキノタムラソウ、ヒメシオンなどの各種の花で吸蜜するほか、湿った地面での吸水行動もよく観察され、時に10頭以上が集合して吸水することもある。県内では4月下旬～9月頃まで成虫が見られ、ほとんどの生息地では年3回の発生と考えられる。また、幼虫の食草は、県内で確認されたものはツルフジバカマのみ。

分布 国内では北海道、本州、九州に分布するが、その分布域は局地的である。県内では、富士山周辺から桂川沿いの県東部、秩父山系の山麓、茅ヶ岳および八ヶ岳山麓周辺などに分布記録がある。富士川の西側にあたる南アルプス地域には全く記録がなく、生息していないと考えられる。

生息環境 富士山麓などの火山性草原や中山間地の耕作地周辺の日当たりの良い草地などが主な生息環境であるが、集落や耕作地周辺にみられる草地に発生している場合もある。本種の食草ツルフジバカマが、林縁から草地の環境に生育するので、本種もそのような環境を好む。近年、里山の草原環境が減少し、人工林の伐採跡地に出来た草地にツルフジバカマが繁茂してくると、そこで発生するようになっていく。

生息状況及び危機要因 過去には個体数が多く群生する生息地も少なくなく、集団吸水する光景も頻繁に見られたが、近年は一部の地域を除いて個体数が激減し、このような光景はめったに見られなくなった。本種の個体数の最も多かった富士山麓の半自然草原でも、個体数の減少が著しく、かつ、個体数が少なくなると採集者が押しかけ、個体数の減少に拍車をかけている。一方、ここ以外の富士山麓では、ここ数年伐採地を中心に分布が拡大しており、草刈りなどの人為作用が適度に加わった場所では、毎年安定して発生する所もみられるようになった。

特記事項 定量的要件① 定性的要件①

執筆者 渡邊通人

ウスイロオナガシジミ

チョウ目シジミチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

Antigius butleri butleri

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張30mm内外のシジミチョウである。翅表は後翅の一角を除いて黒色。裏面は灰白色に黒の模様が入り、後角部にオレンジ色の斑紋がある。年に1回夏に現れる。

分布 北海道、本州、四国、九州に分布。県内では、上野原から県北部、八ヶ岳のミズナラ帯、富士山北麓及びその周辺に局所的に生息している。県中部以南には生息していないものと思われる。

生息環境 上野原地内ではカシワ林で、県北部などではミズナラ林で確認されている。

生息状況及び危機要因 上野原地内や県北部から八ヶ岳の一部で生息が確認されている。また、近年富士山北麓の一部でも確認されたが、いずれの産地でも、その確認個体数は非常に少なく、今後の動向が注目される。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 宮下泰典

アサマシジミ本州亜種 チョウ目シジミチョウ科

Plebejus subsolanus yaginus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧ⅠB類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 ♂の翅表は明るい青紫色、♀の翅表は暗褐色で後翅の外縁に橙色の斑紋列があるが個体変異が多い。裏面は♂♀大差はなく、地色は褐灰色で前・後翅の外縁に橙色帯が走る。近縁のヒメシジミ、ミヤマシジミよりは大型である。主な食草はマメ科のナンテンハギであるが、オオバクサフジなどを食べている個体群も確認されている。

分布 北海道・本州に分布。北海道では現在、道東の限られた地域で見られるのみで、他の地域ではまれ。本州では関東及び中部地方で、山梨・長野を中心として広く分布しているが産地は局限される。東北地方には産せず、西は石川県が西限とされている。県内では、富士川より西の南アルプス地域及び県南部地域には記録がない。

生息環境 日当たりのよい草原に生息、関東・中部地方では火山性の草地に生息している場合が多い。飛び方は緩やかで食草の群落から遠く離れることは少なく、アザミ類、オカタラノオ、キリンソウなどの花で吸蜜することが多い。

生息状況及び危機要因 食草としているナンテンハギが鹿の食害や宅地化の影響で激減しており、点在している生息地では年々減少傾向で、消滅した生息地も多い。現在も残っている富士山麓、御坂山系や県北西部でも、草刈り等の人の管理がされなくなると消滅する場所が増えており、今後の動向が注目される。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 外川倍美

ギンイチモンジセセリ チョウ目セセリチョウ科

Leptalina unicolor

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 ♂♀ともほとんど同じ斑紋をもっており、その違いは翅型に見られ、♀の前翅端は♂に比べ尖りが強い。後翅には和名の由来となった一条の銀色のスジが中央部に見られる。寒冷地では年1回の発生（6～7月）関東から九州にかけての暖地では年3回、中間地帯では年2回の発生。食草はイネ科のススキ、アシ、アブラススキ、オニノガリヤス等。

分布 北海道、本州、四国、九州に広く分布するが、産地は局地的な傾向が強く、南限は鹿児島市。県内では八ヶ岳から秩父山系を経て、富士山及び周辺山地にかけての地域に記録がある。

生息環境 日当たりのよい草地を弱々しく飛ぶ。

生息状況及び危機要因 県内では1980年代頃には富士山や八ヶ岳などの火山性草原や甲府盆地周辺の山地草原の広い範囲で見られた普通種であったが、近年、生息環境がどんどん狭くなるにつれ激減、現在も確認されているのは富士山北麓を中心とした旧6市町村の地域のみとなっている。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 外川倍美

ヘリグロチャバネセセリ チョウ目セセリチョウ科

Thymelicus sylvaticus sylvaticus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張25mm程の小型のセセリチョウである。近縁のスジグロチャバネセセリに酷似しているが、スジグロチャバネセセリの項で述べた通り、雄は、スジグロチャバネセセリの前翅の中室下方に黒色の細い性標があるのに対し、本種にはこれがない。一方、本種の雌は、前翅表中室端外側の黒斑が下まで広がらず外縁の帯が広く全体に地色が暗いことで区別できる。成虫は、年1回7～8月に発生。幼虫の食草としてはカモジグサなどが知られている。

分布 北海道（南西部）、本州、四国、九州に分布しているが、その生息地は局所的である。本県における分布域は広く、近縁のスジグロチャバネセセリが、県北部から東部に限られ、釜無川から富士川の西部には記録がないのに対し、本種は釜無川から富士川の西部も含めた県内のほぼ全域（甲府盆地、高山帯を除く）に記録が散在する。

生息環境 カヤツリグサ科やスゲ等が生えているような明るい草原が主な生息環境である。その中でも、林と接する林縁環境を特に好むようである。

生息状況及び危機要因 過去には、確認地点や個体数も多かったが、近年、確認地点・個体数ともに減少が著しい。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 宮下泰典

クロツバメシジミ東日本亜種 チョウ目シジミチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Tongeia fischeri japonica

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 小型のシジミチョウで、翅表は様に黒褐色、裏の地色は淡黄褐色で数本の黒点列が並び、後翅の肛角部付近に赤斑が現れる。短い尾状突起がある。成虫は年3～4回、4～10月に姿が見られる。越冬態は幼虫で、食草の枯れた葉や茎などの間で冬を越すという。主な食草は、ベンケイソウ科のツメレンゲ。

分布 国内では、本州・四国・九州および岩手・対馬に分布する。いずれの産地も局限される。本州では関東地方にもわずかに産地を見るが、中部地方では、新潟・山梨・長野・岐阜・福井の各県に生息する。県内に産するのは、関東から中部地方に生息する亜種。県内の生息地は、釜無川・笛吹川・富士川の支流沿いと桂川の一部に散在していた。

生息環境 成虫は、河原・堤防・石垣・露岩地など食草ツメレンゲが自生する環境に生息し、ゆるやかに飛翔し、生息地から離れることは少ない。県内では、山間の谷川の露岩地が多く、甲府盆地とそこに流入する河川沿いの堤防が生息地となっていた。

生息状況及び危機要因 過去には、釜無川・笛吹川・富士川の支流沿いに広く生息地が散在していたが、道路沿いの土手や茅葺き屋根などの河川から離れた場所のツメレンゲ生育地からは、ほぼ姿を消した。現在でも生息が確認されるのは、草刈りなどの管理で残されたツメレンゲの群落が見られる玉石堤防が主である。したがって、面積は限られ、しかも孤立している所が多いので、開発や管理放棄によっては容易に生息地の条件を失う場所が多い。生息環境の保全には十分留意することが必要である。

特記事項 定量的要件① 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

ベニヒカゲ本州亜種 チョウ目タテハチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Erebia neriene niponica

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 雌の翅表橙色帯は雄に比べて色彩は淡色であるが幅広く、橙色帯中の黒色眼状紋はその中心に微小白点をあらかし後翅裏面の帯状斑はふつう明瞭（雄はほぼ消滅、雌も産地により消滅）。クモマベニヒカゲより遅く7月下旬～9月に出現。本種の発生は一般のチョウとは異なり、高標高の寒冷地では発生が早く、より標高の低い産地では発生が遅い。一世代の完了に1～2年要する。

分布 北海道、本州。北海道では低山地にも広く分布する。本州中部ではおおよそ1500m以上。本県では八ヶ岳、赤石山脈の山々（南アルプス）に分布する。垂直分布は、クモマベニヒカゲより低いのが上限はより高い。

生息環境 生息環境は亜高山針葉樹林内の沢沿いの草原、森林限界付近の林床の草原、高山草原などの、各種の草地またはガレ場や露岩地、林道の法面や林道脇の草地などに見られる。各種の草花に集まり、生息地では同時に複数見られる事が多い。

生息状況及び危機要因 本県ではおおよそ1600m以上に見られる。南アルプス、八ヶ岳の産地では、シカの食害による影響は多少あるものの、生息地ではまとまった数の個体が飛翔する姿が観察できる。県内でも沢沿いの草地、亜高山帯の笹原、森林限界付近の尾根の草原、林道脇の草地など様々な草地環境で見られる。しかし、南アルプス前衛では消滅した産地もあると考えられる。保護上の適切な調査が必要である。

特記事項 定量的要件① 定性的要件①

執筆者 杉村健一

クモツマキチョウ八ヶ岳・南アルプス亜種 チョウ目シロチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Anthocharis cardamines hayashii

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 前翅長17～20mm程のシロチョウの一種で、オスの前翅表の端は鮮やかな橙色、メスでは白色。共に後翅裏面は緑褐色の唐草模様を配す。成虫は年一回の発生で、5月初旬～7月上旬に出現。幼虫はミヤマハタザオなどアブラナ科植物の主に果実部を食し、蛹化後は翌春まで蛹で過ごす。

分布 国内では、本州中部山岳地帯のみに分布し、産地は局地的である。山梨県では釜無川上流、南アルプス連山とその前衛山地、及び八ヶ岳から知られているが、近年いずれの地域においても目撃情報が減少しており、特に八ヶ岳産の情報が無く心配される。

生息環境 一般に高山蝶として扱われているが、生息地の多くは標高1500m前後の渓谷地帯。本県での生息地は甘利・櫛形山系や尾白・御勅使川上流部などの標高1200m位の山地から大樺沢・大仙丈沢上部といった標高2000m以上の高山帯に達する渓流沿いの河原や崩落地で、特に食草の多く見られるガレ場や崖地を好む。

生息状況及び危機要因 発生地は、崩れ易い急峻な崖地や露岩地、若しくは高標高の河原と言った不安定な環境にあり、そこで最初に育つのが本種の食草であるが、安定すると直に他の草本類や灌木が優勢となり、更にシカの食害も重なり、食草の減少により本種の個体数も減る。また発生地は風水害などの自然現象に加え、砂防えん堤など治水工事による影響も受け易いばかりか、工事等に伴う林道開発は採集者の進入を容易にし、採取圧が増大するなど人為要素も絡んで生息環境の悪化や個体数の減少が心配される。

特記事項 定性的要件①②③

執筆者 山本俊一

ウラギンスジヒョウモン

チョウ目タテハチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

Argyronome laodice japonica

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 ♂♀の色彩や斑紋はあまり差はないが、♀は大型で翅形は丸みをおびる。後翅表面中央の黒色条は連続せず、各室ごとに分離した黒斑となる。オオウラギンスジヒョウモンではこれが連続した黒帯状となる。色調や斑紋の似たものが多いため同定には注意を要する。年1回の発生、暖地では5月下旬頃からであるが、本州の高地帯や北海道では7月より発生する。食草はタチツボスミレ、エゾノタチツボスミレ、ツボスミレなどのスミレ類で草原性のチョウである。

分布 北海道、本州、四国、九州で、屋久島以南からは知られていない。低地から高標高地まで広く分布するが、個体数は多くはない。県内でも低山地から亜高山帯下部にかけての広い範囲で記録されているが、確認出来る個体数は、いずれの場所でも少ない。

生息環境 明るい草原や、土手・堤などに多く、アザミ等の花に群がる。暖地では夏眠するといわれ、秋に入ると再び活発に飛び回る。

生息状況及び危機要因 全国的に草原が減少していることが、この種の個体数に影響し、県内でも、確認出来る場所・個体数ともに減少している。かつては、旧64市町村中39市町村から記録が得られていることが示すように、広く分布していたが、2010年以降は旧13市町村に留まっており、いつのまにか姿を消した場所が多くなっている。

特記事項 定性的要件 a) b)

執筆者 外川倍美

ヒメギフチョウ本州亜種

チョウ目アゲハチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Luehdorfia puziloi inexpecta

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開翅長40～45mm程で、黄色地に黒のだんだら模様。県内では4月から5月初旬に出現する。幼虫はウスバサイシンを食べ、蛹で越冬する。北海道には別亜種が局所的ながら広い範囲に生息する。

分布 東北地方では全県に生息しているが、生息地は局地的。長野県、山梨県での分布は広い。新潟県、岐阜県にも局所的に生息地がある。関東では群馬県の赤城山が産地として知られている。県内では北部、西部を中心に生息する。櫛形山、甘利山などの南アルプス山塊、古杉川、川俣川、大門川などの八ヶ岳山塊、木賊峠、乙女高原などの奥秩父山塊、節刀ヶ岳、黒岳など御坂山塊から記録されているが、近年記録が非常に減少している。

生息環境 落葉広葉樹林やカラマツ林周辺を生息場所としている。

生息状況及び危機要因 近年個体数が激減している。原因の一つとして考えられるのが、鹿の食害によるウスバサイシンの減少である。ここ数年、八ヶ岳以外からの記録は非常に少なく、絶滅の恐れが増大する前に何らかの保護対策を講じる必要があると考える。

特記事項 定性的要件 a) b) c)

執筆者 秋山 隆

オオチャバネセセリ

チョウ目セセリチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

Polytremis pellucida pellucida

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 開翅長約35mm程のセセリチョウ。茶褐色の翅に銀色の斑紋が見られる。飛び方はセセリチョウ科の中では緩やかな方で、葉上に長く止まり、また、アザミ類、オカトラノオ、ウツボグサなどの各種の花でよく吸蜜する。低地では通常年2回、6～7月頃と8～9月頃に成虫が見られる。高標高地では年1回、7～8月頃の発生と考えられる。幼虫の食草はアズマネザサ、メダケ、クマザサなどのタケ科とイネ、ススキなどのイネ科植物が知られている。越冬態は幼虫。

分布 国内では、北海道、本州、九州に分布し、利尻島、対馬、壱岐、種子島、屋久島などにも生息している。県内では、高山帯などの高標高地を除く広い地域から記録が得られているが、分布は局限される傾向にある。

生息環境 里地の雑木林周辺の林縁部、疎林、ササ原、草地など、また、山地や高原などの半自然草原や登山道、林道脇のソデ群落の草地、ササ原など、比較的明るく開放的な場所によく見られる。

生息状況及び危機要因 過去には、県内のほぼ全域に広く普通に分布していたのではと思われるほど、低地から山地まで広く多くの記録が残っているが、生息環境の荒廃などで、分布域・個体数ともに縮小・減少したものと推察される。富士山北麓には、古くは普通に見られたが、現在は全く見られなくなっている。しかし、周辺山地の麓では散在的に確認されている。

特記事項 定性的要件 a) b)

執筆者 岩崎 央

ヤマキチョウ

チョウ目シロチョウ科

Gonepteryx maxima maxima

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
なし

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

種の解説 ♂の翅表は濃黄色、♀は黄白色で、近縁のスジボソヤマキチョウに比べ色調はやや濃い。また、スジボソヤマキチョウのように後翅表の色調が前翅に比べ淡くなる傾向は見られない。年1回の発生で、成虫で越冬し、越冬後5月～6月頃まで活動し産卵する。新成虫は7月中旬頃より羽化をはじめ8月に入ると個体数が多くなる。食樹はクロウメモドキ科のクロツバラに限定されるという。

分布 国内における分布地は、山梨・長野を中心とした本州中部及び東北地方（岩手・青森）の一部のみで、北海道、九州、四国、近畿・中国地方等には生息しない。県内では、南部を除く全域に生息しているが局地的であり、生息地は限られる傾向にある。

生息環境 越冬個体は枯葉に止まったり、湿地で吸水したりすることが多い。新成虫は、アザミなどの高原の草花に集まることが多い。

生息状況及び危機要因 食樹クロツバラの分布は普遍的でないが、本種の分布が非常に狭い地域に限られているのも、そのためと思われる。富士山以外の場所では、時々しか記録されていない。富士山北麓でも広く分布はしているが、多産地では成虫のみならず幼虫まで乱獲され、その数は年々減少傾向にある。

特記事項 定性的要件 a) b) c)

執筆者 外川倍美

オオイチモンジ

チョウ目タテハチョウ科

Limenitis populi jezoensis

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧II類 (VU)

種の解説 前翅長40～47mm程の大型のタテハチョウの仲間で、翅表は黒褐色の地に白斑と白帯を配す。成虫は年一回の発生で、7月上旬～下旬に出現。溪畔や梢上を滑空飛翔し、樹液や獣糞などに吸汁に訪れる。幼虫の食樹はヤナギ科のドロノキやヤマナラシなどで、3齢幼虫で越冬する。

分布 国内では北海道の低山地と関東北部及び中部山岳の亜高山帯に分布する。山梨県では分布情報が乏しく、古くは瑞牆山麓など奥秩父からも記録されているが、最近の記録状況は、八ヶ岳南西麓や南アルプス山系の野呂川・早川・小武川などの源流域のみである。

生息環境 本州では、主に標高1000～1500m位の亜高山帯の溪谷沿いにある食樹が混じる針広混交林周辺や河原、涸沢などを主な生息地としており、本県の場合も同様である。

生息状況及び危機要因 近年の本県における本種の記録は数えるほどしかなく、個体数も極めて少なくなっているものと思われるが、生息地の著しい環境変化は特に報告されていないので、更なる情報蓄積と調査が望まれるところである。

特記事項 定性的要件 a) b)

執筆者 山本俊一

コヒオドシ

チョウ目タテハチョウ科

Aglais urticae connexa

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2005：山梨県カテゴリー
なし

2017：環境省カテゴリー
なし

種の解説 色彩斑紋は雌雄で差がない。表面は赤色と黒色の斑紋。裏面は黒色の地色で褐色の縞模様がある。幼虫の食草としては、ホソバライクサなどのイラクサ科植物が知られている。

分布 国内では、北海道と本州に分布。北海道では、平地から山地にかけて広く分布。本州では東北地方のほか、神奈川県丹沢ヶ岳山頂、山梨県三ツ峠、昇仙峡、清八峠、長野県の浅間山、湯ノ丸山山頂、戸隠山等での採集された記録もあるが、おそらく偶産個体であろうといわれている。本州での確実な分布地は、南アルプス、北アルプスと八ヶ岳のみである。山梨県内では、南アルプスで確認されており、八ヶ岳山塊からは記録がない。

生息環境 年1回、7月中旬頃より発生し、下旬と8月に多い。河原や路上に見られることが多いが、花にも良く集まる。

生息状況及び危機要因 高山の山頂に集まるが多いように思われる。飛翔は敏活で好んで路上に止まる。県内では、南アルプス地域のみから記録があったが、近年、北沢峠からアサヨ峰にかけての地域からの記録が途絶えており、2017年には野呂川林道沿いで数例の記録が確認されたのみである。

特記事項 定性的要件 a) b)

執筆者 瀬田 賢

モンシロチョウ南アルプス高地個体群

チョウ目シロチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

2017：環境省カテゴリー
なし

Pieris rapae ssp.

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 日本全土に普通に生息するモンシロチョウは、日本人には最もポピュラーな昆虫であり、栽培のアブラナ科植物に依存しており、特にキャベツを好むことから、キャベツとともに中国などから運ばれた史前帰化昆虫ではないかともいわれている。しかし、ここに取り上げる個体群は、南アルプスの亜高山帯以上の限られた場所に生息する地域個体群で、幼虫の食草はヤマガラシがほとんどと考えられている。

分布 モンシロチョウ自体は、日本全土に普通種であるが、ここに取り上げるのは、南アルプスの高地帯（現在知られる生息地は、北岳大樺沢と仙丈岳大仙丈沢の標高約1800～2400mの地域）の限られた狭い地域にしかみられない個体群である。

生息環境 沢状部の日がよく当たる食草ヤマガラシが繁茂する明るい草場が主な生息環境で、時に、周辺の疎林や林縁部でもみられる。雪渓の溶ける時期に連動して生長するヤマガラシに合わせるかのように、本地域個体群の生息範囲も、時期に合わせて徐々に標高の高い場所へ移動している。

生息状況及び危機要因 過去の南アルプス北岳における複数の調査時に、大樺沢の限られた場所でモンシロチョウが複数回確認されたのに、麓の広河原や野呂川林道沿いではモンシロチョウが全くみられなかったことから、2016年の6～7月と2017年5～6月に北岳大樺沢で、2017年7～8月に大仙丈沢で調査を行った結果、本地域の個体群は雪渓が溶ける時期・場所に合せて発生・移動しており、年1回ヤマガラシを主な食草として生活していると考えられる結果が得られた。おそらく、かなり古い時代から、南アルプス中心部の亜高山帯から高山帯にかけての地域に孤立して生活している、大変貴重な個体群ではないかと判断されるため、今後の保全の為に絶滅のおそれのある地域個体群の扱いとした。

特記事項 定性的要件①

執筆者 渡邊通人

オオムラサキ

チョウ目タテハチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
要注目種 (N)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Sasakia charonda charonda

2005：山梨県カテゴリー
要注目種 (N)

種の解説 タテハチョウ科では最大級の大型種で、雄は前後翅の表面に紫色の光沢があるのに対し、雌にはこれがなく、体も雄に比してやや大きく、翅形もより丸い。飛翔は敏速で、雑木林を滑空する姿は雄大で貫録があり、1957年に日本の国蝶に指定されている。クスギ・クワ・ニレなどの樹液や、腐果や獣糞などに飛来することもある。成虫は、本州では6月上旬より現れ7月上旬が最盛期。

分布 国内では北海道南西部から本州・四国・九州に分布。県内では、旧長坂町・旧須玉町・旧明野村他の甲府盆地周辺各地、旧六郷町・早川町・旧下部町・大月市等、広範囲に分布している。

生息環境 食樹であるエノキとクスギやコナラなどから構成される、人家近くの雑木林に生息することが多い。

生息状況及び危機要因 近年の土地開発により、生息地が大幅に減っているため、個体数は明らかに減少している。最盛期に、樹液に多数の個体が集まって吸汁しているような光景はほとんど見られなくなった。

特記事項 定性的要件 a) b)

執筆者 外川倍美

キシマミドリジミ

チョウ目ジミチョウ科

2018：山梨県カテゴリー
要注目種 (N)

2017：環境省カテゴリー
なし

Chrysozephyrus ataxus kirishimaensis

2005：山梨県カテゴリー
要注目種 (N)

種の解説 前翅長19～22mm程のいわゆる“ゼフィルス”と呼ばれるミドリジミ族の一種。オスの翅表は金緑色で裏面は銀白色。一方メスの翅表は、暗褐色の地に青色斑を配し、裏面は茶と白色の斑模様。成虫は7月下旬から出現し、梢上を敏速に飛翔する。幼虫の食樹はアカガシ、ウラジロガシなど常緑カシ類の新芽～若葉で、越冬態は卵。

分布 国内では本州、四国、九州、対馬、屋久島に分布するが、産地は局地的である。山梨県での分布も極めて局所的で、越冬卵等の採集記録から現在確認されているのは、身延町大城川及び南部町富士川流域だけである。その他、早川及び芦川流域からの採集記録もあるが、最近の報告例はない。

生息環境 照葉樹林に生息する代表的なミドリジミ族の一種。生息地は暖温帯の山地で、常緑広葉樹のある林の斜面や渓谷沿いが多く、湿性のやや暗い環境を好む傾向があり、本県の場合も同様である。

生息状況及び危機要因 本県に生息するミドリジミ族中、生息地、個体数とも最も狭かつ少ない種であり、生息地はいずれも渓谷沿いにあるスギ・ヒノキ等の植林地の外縁部に片寄っている。そのため植林や管理作業、渓谷の治山工事等により、食樹を含む照葉樹林の伐採などで生息地は常に影響を受けやすい環境下にあり、近年の越冬卵調査でも年々確認数は減少傾向にある。

特記事項 定性的要件 a) b)

執筆者 山本俊一

ヒサマツミドリシジミ チョウ目シジミチョウ科

Chrysozephyrus hisamatsusanus

2018：山梨県カテゴリー
要注目種 (N)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
要注目種 (N)

種の解説 開張 30mm内外のシジミチョウで、雄の翅表は金緑色に輝き、雌は黒地で前翅に青と朱色が入ってどちらも美しい種類である。雌には、前翅に青と朱色が入った AB 型の個体が多いが、稀に青だけ入った B 型も知られる。

分布 本州中部以西及び四国、九州に生息しているが、その生息地は局地的である。神奈川県の丹沢で記録があるが追加記録がない。現時点での確実な分布の東限は本県と良いであろう。早川町、身延町を中心とした県南部に局地的に生息している。近年、富士川東部でも記録が得られている。

生息環境 県南部の沢沿いのカシ類を中心とした雑木林に生息している。特に、ウラジロガシが本種の主要食餌植物であり、標高が 500 m 前後の場合が多い。成虫は標高の高い峠等でも得られており、移動性も相当であると推測される。

生息状況及び危機要因 県南部は杉、桧等の植林地が多く、カシ類を中心とした林が現存している所は岩が露出した急傾斜地に限られるためか、本種の産地もこういう所に多い。今後も、このような地域には植林や開発が及びにくいと考えられるので、気候等の年次変動による個体数の増減はあるにせよ、生息環境は他種より比較的安定しているといつてもよいかも知れない。

特記事項 定性的要件 a) b)

執筆者 宮下泰典

マエアカヒトリ

チョウ目ヒトリガ科

Aloa lactinea

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張♂約60mm、♀約65mm。両翅は純白色。前翅前縁はあざやかな紅色。腹部背面は、黒と黄色の虎縞模様。目立つ蛾である。5～9月に得られているが、詳しい化性は不明。ダイズやトウモロコシの害虫として知られていたが、最近ではネギの害虫として復活しつつある場所もある。

分布 本州、四国、九州に分布。南西諸島からも記録がある。県内では、県東部に記録があった。

生息環境 作物栽培の畑地および河川敷の草原。

生息状況及び危機要因 山梨県では、上野原市や日野春などで知られていたが、50年以上記録はない。以前は害虫とされていたが、多くの地域で姿を消し、各地で絶滅が危惧されている。農業散布が激減の要因と考えられている。レッドデータブックは、環境省 (NT)、長野県 (CR+EN)、岩手県 (DD)、秋田県 (CR)、千葉県 (絶滅生物)、東京都 (EX) が指定している。

特記事項 定性的要件①

執筆者 岸田泰則

ウスクモヨトウ

チョウ目ヤガ科

Pabulatrix pabulatricula

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張28～32mm。前翅地色は灰白色だが、やや褐色味を帯びることもあり個体変異がある。各横線、剣状紋は明瞭。後翅は暗色で、横脈紋が認められる。年1化、7月下旬～8月に出現する。食草は、国内では記録がないが、ヨーロッパではイネ科のスマガヤ属を食することが知られている。

分布 北海道、本州（青森県、岩手県、山梨県）に分布する。県内では、八ヶ岳山麓に記録がある。

生息環境 森林の間にある草原。

生息状況及び危機要因 山梨県では、北杜市清里で1965年に採集された古い記録があるだけで、最近の記録は聞かない。ヨーロッパでも絶滅に瀕しているとされる。草原の環境悪化が要因と考えられている。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

スキバホウジャク

チョウ目スズメガ科

Hemaris radians

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張45mm程の、翅の内側に鱗粉がなく、透き通っているスズメガである。近い種にクロスキバホウジャクがいるが、本種は体全体が黄色く後翅のつけ根も黄色い。年に2回発生し、翅の透明部分の多いものが春型、その部分に黒色鱗粉が発達するものが夏型とされる。

分布 本種の分布は広く、北海道から南西諸島まで分布している。いずれの地でも個体数は少ないとされている。県内では、富士山北麓及びその周辺で確認されている。県南部にも未発表記録があり、県北部にも生息の可能性があるので、今後の調査が期待される。

生息環境 オミナエシが生えているような明るい草原である。幼虫の食草として、オミナエシの他にオトコエシ、スイカズラが知られているが、近年その様な植物が生育する草原は少なくなったように思う。

生息状況及び危機要因 前述したような本種の好む草原環境は少なくなったが、多くの大規模な草原は、人為的な営みによって守られている。代表例が富士山北麓の梨ヶ原で、ここは毎年行われる火入れ（野焼き）によって、草原環境が守られている。本種は、このような人為的な営みの結果として守られている種といえるだろう。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 宮下泰典

ベニモンマダラ本土亜種

チョウ目マダラガ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類（VU）

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧（NT）

Zygaena niphona niphona

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張は、♂♀ 23～33mm。頭部・胸部は黒色、前翅は黒色でコバルト色あるいは銅色の光沢があり、通常5～6個の紅色斑紋がある。成虫は年1化、7～8月に出現する。卵塊で産卵され、幼虫は群生することもある。成虫は、昼間活発に活動し、食草であるツルフジバカマヤクサフジをはじめとした各種の花によく集まる。

分布 国内では北海道と東北（青森・岩手）から本州中部にかけて（福島・栃木・群馬・長野・山梨・神奈川）の草原に分布するベニモンマダラの本土亜種。山梨県内では、富士山麓及びその周辺山地、県北西部に記録がある。

生息環境 火山性草原、河川敷など明るい草地进行を好み、人工的な荒地や休耕地に生息することもあるが、いずれも、食草のツルフジバカマヤクサフジなどが繁茂する草地に集中的に発生する。富士山北麓の一部地域で、荒地に侵入した外来植物ナヨクサフジから卵塊と幼虫を確認したことがある。

生息状況及び危機要因 食草であるツルフジバカマヤクサフジが広く分布することもあり、過去には富士山麓の半自然草原や県北西部の休耕地周辺で群生するのがみられたが、近年、県北西部からはほとんど確認されず、個体数の多かった富士山麓の半自然草原でも、発生地が限られるようになり、周辺の山麓の里山環境に辛うじて記録が散在する状況となっている。幼虫は体内で青酸系の毒物を生成し、それを成虫まで保持するので天敵がほとんどいないといわれるにもかかわらず、確認地点数と個体数は減少し続けている。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

エゾオオバコヤガ

チョウ目ヤガ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類（VU）

2017：環境省カテゴリー
なし

Diarsia dahlia

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 32～36mm。前翅地色は焦げ茶色を強く帯びる。内外横線は不明瞭であるが、亜外縁線は細いが明瞭である。年1化、8～9月に出現する。食草は、国内では記録がないが、ヨーロッパでは各種草本を食し、多食性とされている。

分布 北海道、本州中部（長野県、山梨県）。

生息環境 北海道では低地草原に生息するが、長野県梓山やヨーロッパでは湿性草原に生息する。

生息状況及び危機要因 山梨県では北杜市清里での古い記録があるのみである。湿性草原の環境悪化に伴い、絶滅が危惧される。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

ハスオビカバエダシヤク

チョウ目シヤクガ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類（VU）

2017：環境省カテゴリー
なし

Pseudaspilates obliquizona

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 ♂ 21～27mm、♀ 27～30mm。前翅は明るい褐色で、翅頂から後縁に至る白い縁どりをもつ褐色の斜帯がある。成虫は年1化、7～8月に出現する。食草は未知である。

分布 日本固有種で、本州の中部地方に分布する。県内では、北西部から西部の地域に記録がある。

生息環境 標高 1000 m以上の高原に生息する。

生息状況及び危機要因 山梨県では、北杜市清里や鳳凰山で記録があるが、稀な種である。草原の環境悪化により、個体数が減っていると考えられる。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

オビグロスズメ

チョウ目スズメガ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

Sphinx crassistriga crassistriga

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 50～75mm。翅はやや細長く、翅頂はやや尖る。前翅は暗色であるが、白色鱗を散布する。前翅の第2、3室に明瞭な黒条がある。食樹はマツ科のモミが知られており、ストローブマツでの飼育記録もある。成虫は、年1化7～8月に出現し、明け方薄暮期にライトトラップに飛来することがある。

分布 日本特産種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道のものは別亜種とされる。山梨県では、大月市の記録が知られるのみ。

生息環境 モミが点在する森林。

生息状況及び危機要因 山梨県では大月市での記録があるが、それ以外の記録はない。レッドデータブックは、埼玉県（希少種1）、千葉県（重要保護生物）が指定している。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

イブキスズメ

チョウ目スズメガ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

Hyles gallii

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 60～85mm。スズメガ科の美麗種。前翅には、翅頂から後縁にかけて黄白色帯がある。後翅の中央は幅広く赤色を帯びる。成虫は年1化、6～8月に出現する。幼虫は、アカネ科のカワラマツバやアカバナ科のヤナギランを食す。

分布 国内では、北海道、本州、九州、対馬に分布。県内では、富士山麓や甘利山等で記録がある。

生息環境 標高 1000 m以上の高原に生息する。

生息状況及び危機要因 富士山北麓本栖高原・梨ヶ原や甘利山などの草原で記録があるが、シカの食害によって食草のヤナギランが激減し、その影響で本種も絶滅が危惧される。レッドデータブックは、長野県 (VU)、宮城県 (CR+EN)、青森県 (情報不足)、秋田県 (DD) が指定している。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

クワヤマエグリシャチホコ

チョウ目シャチホコガ科

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

Ptilodon kuwayamae

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張♂ 31mm内外、♀ 31～36mm。前翅の地色は明るい橙褐色で、外横線は前縁に向かってより近くへ強く曲がる。成虫は年2化、6月初旬と8月に出現する。食草はマメ科のヤマハギが知られる。

分布 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布。県内では、八ヶ岳山麓などに記録がある。

生息環境 幼虫の食草ヤマハギが点在する草原に生息する。

生息状況及び危機要因 山梨県では、北杜市清里などの高原に産していたが、草原の環境悪化に伴い個体数が減っている。レッドデータブックは、秋田県 (CR)、長野県 (NT) が指定している。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

ウスジロドクガ

チョウ目ドクガ科

Calliteara virginea

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 ♂ 51～55mm、♀ 65～70mm。体・翅ともに純白であるが、後翅の基半は黒っぽくなる。リンゴドクガの♀と間違われることがあるが、本種は、純白なので区別できる。成虫は年1化、5～6月に出現する。食草はマメ科のハギ類が知られている。

分布 国内では、本州（東北地方、中部地方）に分布するが、産地は局所的である。

生息環境 ハギ類が生えている草原に生息する。

生息状況及び危機要因 山梨県では西湖周辺で採集された記録があるが、それ以外の記録はない。レッドデータブックは、長野県（NT）、岩手県（情報不足）、宮城県（VU）、秋田県（EN）が指定している。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

ミヤマキシタバ

チョウ目ヤガ科

Catocala ella ella

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 51～61mm。前翅の斑紋は明瞭で、特に中剣紋は黒く明瞭。後翅の地色は橙黄色で、中央黒帯は外縁黒帯と継らない。腹部は濃黄色。成虫は年1化、7月中旬～9月に出現する。食樹はカバノキ科のハンノキが知られる。

分布 国内では、北海道、本州に分布。県内では、北西部に記録がある。

生息環境 ハンノキ林に局地的に産する。

生息状況及び危機要因 山梨県では、北杜市大泉町や白州町で記録があるが、極めて局所的。食樹のハンノキも絶滅危惧種となっており、その伐採による絶滅が危惧される。レッドデータブックは、環境省（NT）、岩手県（D）、宮城県（VU）が指定している。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

ヒメシロシタバ

チョウ目ヤガ科

Catocala nagioides

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 48～57mm。コシロシタバに似るが、翅はやや細長く、斑紋はやや不明瞭。本種の後翅の白紋はより小さいことで区別できる。成虫は年1化、6月中旬から出現し、10月まで見られることがある。食樹はブナ科のカシワが知られる。

分布 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布。県内では、旧下部町などに記録がある。

生息環境 カシワ林に強く依存し、ハヤシドリシジミとほぼ同じ環境に生息する。

生息状況及び危機要因 山梨県では、旧下部町などでわずかに知られているが、カシワ林の衰退によって産地が失われている可能性が高い。レッドデータブックは、環境省（NT）、青森県（D）、宮城県（VU）、群馬県（EN）、埼玉県（希少種）、長野県（DD）、大分県（VU）が指定している。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

ヒメトガリヨトウ

チョウ目ヤガ科

Gortyna basalipunctata

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 30～38mm。ゴボウトガリヨトウに似るが、小型であること、前翅の地色はより濃色であること、外縁は直線的になることで区別できる。成虫は年1化、8～9月に出現する。食草は国内では未知であるが、海外ではイネ科のトウモロコシ、キク科のヨモギ属、フキ属、タデ科のイスタデなどが知られている。幼虫は茎の中に穿孔する。

分布 国内では、北海道、本州、九州に分布。県内では、道志村に古い記録があるのみ。

生息環境 草地に生息する。近年の採集記録はあまり聞かない。

生息状況及び危機要因 山梨県では、道志村で1973年に採集された1♂の個体を検しているが、その他の記録は知らない。草地を丹念に探せば発見される可能性はあると思う。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

ミチノクキリガ

チョウ目ヤガ科

Cosmia mali

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 35～42mm。キシタキリガに似るが、前翅は茶褐色で、ややピンク色を帯びることで区別ができる。成虫は年1化、6～7月に出現する。幼虫はバラ科のリンゴを食することが知られている。リンゴ以外も食していることは確かだが不明である。

分布 日本固有種で本州に分布するが、産地は局所的である。県内では、旧明野村に記録がある。

生息環境 二次林の雑木林で採集されるが、詳しい生息環境は不明。

生息状況及び危機要因 山梨県では、旧明野村のクスギを中心とした林で採集されていたが、最近の採集記録は聞かない。雑木林の伐採が要因と思われる。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

シロオビヨトウ

チョウ目ヤガ科

Hadena (Hydena) compta armeriae

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 開張 21～29mm。前翅の地色は灰黒色で、中央に広い白色帯があるので、同定を間違えることはない。成虫は年1化、7月～8月に出現する。食草はナデシコ科のカワラナデシコが知られる。

分布 国内では、北海道、本州（東北、中部）に分布。県内では、八ヶ岳山麓に古い記録がある。

生息環境 標高約1000m以上の高原。ナデシコ類が繁茂している草原。

生息状況及び危機要因 山梨県では北杜市清里に古い記録があるが、それ以外は知られていない。草原の環境悪化が要因と考えられる。レッドデータブックは、環境省 (NT)、秋田県 (EN) が指定している。

特記事項 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則